
三日月は眠る

詩音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三日月は眠る

【Nコード】

N2575G

【作者名】

詩音

【あらすじ】

現在より先の未来、日本の人口は爆発的に増えた。その対策をするために政府が作ったのは、謎に包まれた組織「クレセント」だった。

Chapter..00（前書き）

この物語はフィクションであり、登場人物や組織は架空のものです。
なお、作中には未成年者の喫煙場面がありますが法律で禁止されて
おります。

Chapter:00

それは晴天の名にふさわしい夏の日だった。蝉がかしましく鳴き、夏特有の熱気がすべてを覆う。

泣き黒子のある少女は短めの白いワンピース姿に不似合いな高いヒールのサンダルで床を鳴らし、颯爽と病院内を歩いている。

彼女は見知った人物が向かい側に見えて足を止めた。

「お兄ちゃん」

嬉しそうに笑う少女に対して、兄である男はややぎこちなく手のひらを挙げた。

Tシャツにジーンズのラフな格好をした男は耳の後ろを何度か掻く。

「見舞い、来てくれたのか」

「うん」

抱えていた花束を大事そうに持ち直す。

憂いの混じった微笑みは、兄妹でどこか似ているものがあつた。

「今日はあたしも会える？」

彼女は何度かここを訪れているらしい。歩き慣れた道は自然と足取りを軽くしていた。

「会えるけど、さっき眠ったところだから起きないと思う」

「具合はどう？」

「回復には向かってるって医者が言ってた」

「そっか、良かった」

安心したのか、ふわりと少女は笑う。

「寝てる邪魔したくないからお見舞いはまた今度にしようかな」

「悪いな」

兄が申し訳なさそうに眉尻を下げた。昔からの彼の癖だ。

「ううん。それより」

そこまで言って、目的の病室手前で少女が歩みを止める。

約一人分の空間が出来た。

「ホントに、何も覚えてないの？」

「……ああ」

一瞬力んで出来た眉間のしわを、少女は見逃さなかった。伏し目がちな男に詰め寄る。

「全部？ あたしのことも？」

「お前のこと話したら会いたいって言ってたよ。記憶を失ったのはある一部分に関連したことだけだ」

「そう……」

思い出したいくないことでもあるのか、少女はさっと兄から視線をそらした。

「じゃああのことも？」

「名前聞くと頭が痛くなって思い出せないらしい」

見てるだけでこっちも痛くなるよと兄が悲しげに微笑む。

二人の周りには誰一人いない。あまり効かないクーラーがごうごうと音をたてていた。

「拒絶反応かな」

「さあ」

「お兄ちゃんからしたら、忘れてくれてよかった？」

冗談混じりの少女の問い掛け。

「……正直言うと、少し戸惑ってる」

うつむいて、か細く低い声一つ。何かを恐れているような、そんな声だった。

「二人に一番酷い思いさせたのは、きっと俺だ」

しがらみから解放されない自らの兄から窓の外へと目を移す。

彼女もまた、抜け出すことが出来ないでいた。

あのときのこと、まだ傷跡になっている。

「もう半年経つんだね」

「そうだな……」

二人の脳裏には、半年前の出来事が過ぎっていた。

Chapter 01

三日月に、休息はないのだろう。

喧騒から離れた場所にあるコンクリート造りのビルは三階建て。
エレベーターはない。

履きなれたローファーで一人の女子高生が階段を蹴り上げて目的地である三階にたどり着いた。セミロングの黒髪がさらりと揺れる。四つ並んだドアの一番手前に立つ。吐き出した白い息は夜の闇に溶けた。

キリハラアスカ
「桐原明日香です」

サインペンで書かれた事務所の独特な文字を視線に入れながらノックをして名乗れば、事務所から入ってと短い返事が聞こえた。

「悪かったな、折角の休日呼び出して」

薄汚れた天井や壁、応接用のソファも所々つぎはぎが見られる。そこから少し離れたデスクに、明日香の上司はゆったりと座っていた。ドアの真正面にそれがあつたため必然的に真っ先に目を合わせることになる。

「いえ。慣れてますから」

言葉とは裏腹にあまり申し訳なさそうには見えない須藤葵に明日香は無表情で答えた。

「……それ嫌味？」

「わかってて聞くのも嫌味だと思いますよ」

軽い掛け合いをしながら明日香はグレーのダッフルコートを脱いで自分のロッカーにしまう。

こんな碎けた話し方が出来るのは、身寄りのない彼女の父親代わりだからだろうか。

伸ばしたままの髪に無精髭が生えた彼は無意味な役割だったネクタイを更に緩めた。

「客はもうブラックルームに通したから。ついでに書類もやつた」

「……ありがとうございます」

クライアントと接触する予定は三日後だったのだが、急な向こうからの要望で今日に変更し、彼女の休日は消えたらしい。

当人は用事もなかったから問題はないようにで淡々と身形を整えていた。

「桐原」

「何ですか？」

「あげる」

ドアの前で立ち止まった明日香に葵が何かを投げて寄越した。両手でそれをキャッチする。

「……また変わった味選びましたね」

手のひらに降ってきたのは飴だった。たこ焼き味だ。前はかぼちゃ味だか煮干し味だか。

葵の趣味は変わり種の飴を食べることで、飴のためならいくら運送費がかかっても食べたいらしい。

「今度こそお前も旨いって認めると思うぞ」

「どーも」

冷めた調子で礼を言い、制服のポケットにしまう。

別々で普通に食べたいと、明日香はあえて言わなかった。一度言っても聞かなかったため諦めたのだ。

事務所を離れて通路の一番奥、角部屋に向かう。事務所二部屋分の広い部屋が、明日香の主な仕事場だ。

「もう、いや……」

真っ暗な闇に豆電球の灯がぼんやりと浮かんだその真下に、泣き崩れて小刻みに肩を震わせる女がいた。

二十代前半くらいの彼女はパーマがかかった茶髪を振り乱しながら、いやいやと首を横に振る。

「どうしたんですか？」

なるべく優しく、明日香が女に声をかける。振り向いたときにふわっと酒の臭いが鼻をくすぐった。

「会社でね、失敗しちゃったの。上司には怒られるし、同期や後輩からは冷めた視線浴びるし」

明日香の存在に一瞬驚いた顔をしたものの、酔った女はべらべらと喋りだす。

「挙句の果てには解雇、嫌になっちゃう。私はお金にならない残業をずっとやって、会社に貢献してきたのに」

納得がいかないのか、息継ぎをしないくらいに饒舌だった。

クライアントの愚痴を聞くのも仕事の一つ。明日香は黙って耳を傾けていた。

「両親だって早くに亡くなるから私はずっと独り……」

「そう、なんですか」

この仕事で演技力も身に着いた。冷めきった心には何の感情が湧かなくても、悲痛な声が出せる。

鼻をすすってほんと彼女は息を吐き出す。

「なんだか疲れちゃったみたい。他人の貴方に話すようなことじゃないのに」

明日香は首を左右に振って大丈夫だと答えた。

「一点確認したいんですけど」

「何かしら？」

ホンダヤコ

「貴方は本田弥子さんですか？」

泣き腫らした赤い目をのぞき込んで尋ねる。本田弥子と呼ばれた女の潤んだ目は次第に丸く大きくなった。

「どうして私の名前……」

「申し遅れましたが、紹介屋の桐原と申します」

ブレザーのポケットから慣れた手つきで名刺を取り出す。

床に座り込んだままの彼女にそれを手渡した。

「貴方が？」

名刺を受け取り、しげしげ眺め倒した後、目線を上げて今度は明日香をじっくり見つめる。

明日香は葵から教育された嘘っぽい笑顔を振りまく。

「まだ高校生じゃない」

「この仕事に年齢は関係ありません。私は中学のときからやっていました」

驚いたままの本田弥子を気にせず、明日香は机に置かれていたファイルを手を取った。クライアントの名前や住所はもちろん、会社での階級や生活態度等の細かなことが書かれている。

「本題に入りましょうか。貴方は我々に依頼をしましたね」

ぴくりと彼女の肩が揺れた。それを無視して明日香はつらつらと文章を読み上げる。

「ちょうど一週間前の夜零時五十分、貴方から弊社にメールが届きました。内容は自身を殺してほしい、というものでしたが」

そこで言葉が止まった。

本田弥子はただただうつむく。

「念の為にうかがいます、本気ですか？」

「じゃなきゃ、メールなんか送りません……」

「それもそうですね」

ファイルを閉じた。ここまで作業が来たらもうこれは必要ないと判断したのだ。

「自殺する気はないんですね」

「やろうとしたけれど、出来なかったの」

ビビッドピンクのカーディガンの袖からちらりと顔を出したリストカットの傷跡。幾つも重なった歪んだ線が刻み込まれていた。

それを横目で確認した明日香は微笑む。

「わかりました。ではこちらの契約書にサインをお願いします」

ファイルの横に用意されていたバインダーを見せる。

ワープロで入力された用紙には依頼を行っただけで、こちらには落ち度がないと認めることを了承するためのサインだ。

「そんなことまで？」

「何かで貴方のことが明るみに出た場合の最終的な切り札として使えます」

悪用することは絶対にない、そう言う彼女の警戒心が微かに和らいだ。

「それでも構わなければお願いします」

明日香と契約書を何度か見比べて、本田弥子ははっきりと丁寧な字で氏名を書いてみせた。

「ありがとうございます、これで契約完了です。それではあちらの部屋に担当者が待機しております」

ブラックルームは文字通り黒い部屋。床も壁も一面黒い。

必要な場所に電球がついただけの薄暗いそこが事務所二つ分なのは契約するか話す部屋と、依頼を執行するための部屋で分かれているから。

ふらつきながらも黒塗りのドアに手をかけたクライアントの名前を明日香が呼ぶ。

「来世は幸せに満ち溢れた人生でありますように」

「ありがとう」

閉まるドアを見ながら、吐き気を感じて身体を机に預けた。クライアントの嬉しそうな笑顔が頭をかすめる。

歯がゆい気持ちを取り除くように、明日香はフローリングの床にバインダーを叩き付けた。

床に残ったいくつもの傷が、彼女を嘲っているようだった。

Chapter: 02

「今日カラオケ行かない？」

「ごめん、予定あるんだ」

明日香は友人の誘いを断った。断るのは決して少くないのだが、何故か友人は目を丸くした。

「彼氏出来たの？」

「違う違う、家の用事だよー」

協調性を重視しすぎるうざったい友人とそれに笑顔を振りまく仮面の自分、社会に出てもろくに役立たない勉強も全て、彼女は嫌いなのだ。

そんな彼女が意味のない学校に毎日来るのは、ある人間を見張るためだった。

「あれ、静谷^{シズヤ}どうした？」

そばにいる友人達の目が一気に教室のドアへ向かった。またか、と明日香はため息を零す。

制服の上に黒いセーターを着た彼は、隣のクラスの人間だ。陶器のような色白い肌に、色素の薄い茶髪が目立つ。

彼曰く、茶髪は地毛だそうだ。

「ちょっと教科書忘れてさ。借りて良い？」

華奢で細身の彼は無口で穏和な性格らしい。申し訳なさそうな笑顔も不思議と絵になる。

「おー、待ってろ」

「ありがとう」

明日香のクラスの男子に微笑みかけてすぐ、涼しげな目が明日香一瞬に向いた。彼女はそれを完璧に無視。

「後で返しにくるから」

「忘れんなよー」

姿が見えなくなると感嘆のため息がそこら中から聞こえてくる。

「いつ見ても綺麗だよね」

「うん、かつこいいい!」

何度も頷き盛り上がる友人達を尻目に、明日香は携帯電話を開いた。メールが一件。

午後五時にいつものところで。

短い内容を一瞥してポケットに戻す。

くるくると変わっていく話に混ざる気にはならなかった明日香はただ右から左に流して、約束の時間までやり過ごすことにした。

寒空の中、赤いチェックのマフラーに顔をうずめて足早に道を進む。

たどり着いたのは路地裏に隠れた二階建ての喫茶店。クリーム色の壁に深いグリーンの屋根は英国風で明日香は気に入っていた。

店内に入り、真直ぐ奥の席へ向かうが途中で歩みを止める。先客だ。

明日香がいつも座るその場所に、シズヤトウヤ静谷十夜はいた。

「やあ」

目眩するくらい色鮮やかな画集から目を上げた彼は優雅な休日を過ごしてるように見える。

「座らないの？」

やんわりとした指摘に内心舌打ちをして、明日香が指定席の向かい側に腰掛ける。

仮面を外せば仏頂面が常な明日香に対して十夜はいつも微笑みを

絶さない。

「今日は何？」

「わかってるんじゃない？」

高圧的な明日香以上に冷淡な彼の声。彼の崩れない微笑みは学校の明日香と笑い方が似ていた。

「また必要になった」

ど真ん中直球の発言。彼女自身も予想はしていたが、頭から血の気が引いてくのが嫌でもわかった。

しかし気の強い彼女はそんな素振りを見せたりはしない。

「間隔、狭まってない？」

「そうかな」

はぐらかす十夜に苛つきながらポケットに手を突っ込んだ。

「制服に煙草はやめた方が良くと思うけど」

煙草の箱に明日香の手が触れたのと同時に十夜は言った。お見通しというやつだ。

「肺が黒くなるし、健康にも良くない」

「精神安定剤なの。あんたが変なことばっか言うからいけないんじゃない」

「売上の二割は桐原に入れてるだろ？」

「そういう問題じゃない」

物分かりの悪いふりをする彼に彼女は声を荒げた。もう一度煙草に手を出そうとすると、ぱたぱたと足音が聞こえて両手をテーブルに戻す。

「お待たせえ」

金に染めた髪を後ろで束ねた細身の男はシンプルなシャツとスラックス姿にエプロン付きで現われた。

唯一異質なのは語尾を伸ばしたところだろう。

「明日香がココアで十夜君がミルクティーね」

ここのマスターとして働いてる片瀬七緒はてきぱきとカップを置いていく。常連の好みは把握済みらしい。

湯気のたつココアは見るからに温かそうだった。

「ありがとうございます」

「ふふっ、アタシ礼儀正しい男の子好きよ」

ばかりとウインクをしてみせる七緒は生物学上で言えば男。しかし本人は女だと言い張る。

実際彼は男女両方から見ても美人だ。切れ長の瞳に薄い唇、女だと言っても騙せるほどだ。

「七緒さん、前に言ってた会社員は？」

「ああ、駄目だったわ。妻子持ちだって」

七緒はあっけらかんとして言った。

結婚はしないが恋愛は目一杯したい、それが彼もしくは彼女のモットーらしい。

「一部じゃ流行ってる同性愛も、理想の中だけなのかしら」

七緒は物憂げなため息を吐き出して言った。

「僕は現実にあっても良いと思いますよ」

「そう？ 十夜君はもしかしてそっち系？」

「いえ。どっちも大丈夫です」

「まあ、今どきの子ね！」

二人の間で繰り広げられる、ついていけそうにない会話に明日香は黙々とココアを飲んでやり過ごした。

「余ってるケーキがあるからちよっと待ってて」

鼻歌混じりで七緒は歩いていった。

「話戻すけど、この前の分は？」

「もう売れちゃったよ。後で通帳見たら？ 入れといたって七緒さんが言ってたから」

手付かずだった十夜のカップに角砂糖が五個入っていく。流石に溶けないんじゃないか、そう明日香が言う前に彼はカップを口に運んだ。

「そう簡単に自殺希望者なんて出てこないと思う」

「どうかな？」

十夜の含み笑いが明日香は苦手だ。何も答えない彼女に十夜は言葉が続ける。

「今の世界に満足してる人間は少ないと思うよ」

自殺したくてもそんな勇気のない人間。そんな人達から依頼を受けて殺すのが静谷十夜で、それまでに必要な書類等の作成を桐原明日香がやっている。

それが二人の仕事場、クレセントだ。

「でも死を選ぶとは限らないわ」

「最終的に人は死を選ぶよ」

二人になるといつもこうなる。絶対の自信を持つ十夜とそれを認めない明日香。

答えの見つからない堂々巡り状態だ。

「お待たせ、バナナシフォンケーキよ」

水を張ったような空間の中でふわりと香るバナナの甘さに気を取られていると、十夜が急に立ち上がった。

「ごめんなさい七緒さん、これから人と会う約束なんで失礼します。ケーキはまた今度」

「あらそうなの？」

残念ねえ、と七緒さんは口を尖らせる。

「桐原」

「何？」

「品物が入ったら教えて」

いつも通り微笑んでいても目は笑っていないかった。本気なのだ。了承を告げると十夜はいつもと変わらない笑みで帰っていった。

律義に明日香の分の代金を置いて。

「二人が並ぶと恋人みたいなのに、もったいないわあ。明日香にその気がないなんて」

七緒がシフォンケーキをテーブルに置く。さっきまで十夜が座っていた席に腰をおろす。

「怒らせたの？」

明日香は首を横に振った。

彼にそこまで深く立ち入ろうと明日香は思わなかった。

「アタシがもう十年若かったらねえ……」

「それより七緒さん。本田弥子、どうなった？」

人生に嫌気がさして依頼し、明日香と十夜で葬った女。

搜索願いが出されていたらしく、警察が動いたそうで明日香は気になって仕方なかったのだ。

「ああ、大丈夫みたいよ。自殺未遂したことがあるってわかって捜査打ち切り。そっちの線で色々調べるみたいよ」

「そう」

「不満だったかしら？」

七緒の好奇の目が光った。

「そんなことないけど」

そこで一度明日香は口をつぐんだ。七緒はただじっと返答を待つ。

「まだ、慣れない」

ぽつんと呟いた声は弱々しかった。

「良いのよそれで。それが普通なんだから」

向かい側から伸びてきた手を払うことはなかった。男の割に華奢な七緒の指が明日香の黒髪に触れる。

その瞬間、携帯電話のワンコールが鳴った。事務所からの呼び出しだ。

「ケーキ、また今度ね」

ぱっと明日香の髪から手が離れた。

「ごめん」

「良いのよ。それより早く行きなさい、葵ちゃんは気短だから」

三十路過ぎた二人は高校の同級生らしく、お互いの性格も熟知していた。

明日香は頷いて荷物を引っ掴み店を出る。

空は鉛色に曇っていた。

Chapter: 03

「また依頼がきた」

開口一番がこれだ。

げんなりしつつ明日香は渡された資料に目を通す。

「名前は伊沢颯、三十歳独身。七緒に今詳しく調べさせてる」
イザワハヤテ

早口でまくし立てた後、葵の携帯電話に着信が入る。

やや煩わしそうにスーツの内ポケットをまさぐってそれを取り出した。

「ひとまず書類作っというて」

「わかりました」

指示に従い、自分のデスクに戻る。三年前は最新だったノートパソコンの上に資料を置き、ブラックルームに足を向けた。

執行部屋という名の十夜専用部屋のドアを控え目に叩く。

「はい」

足を踏み入れたことのないそこから聞き慣れた声。早々と店から出ていってもうここに來たらしい。

「依頼がきた」

「僕の予想通りだね」

重そうなドアから顔を出してきたと思えば十夜は不敵な笑みを浮かべていた。

「詳しいことはまた追って連絡するから」

「気をつけた方がいいよ」

「……は？」

明日香は怪訝な顔で彼を見る。彼女が目を離した隙に執行部屋を閉めて、ドアに背を預けていた。

「きっと桐原は殺される側の人間になる」

突然すぎる殺害予告。聞かされた本人には気持ちの良いものではない。

「どういう意味」

「僕の持論では、世界は殺されるものと殺すもの、どちらかしかないんだ」

明日香はただ十夜の持論に耳を傾ける。

「言うなれば僕が後者で桐原が前者。僕から見ても充分存在感あるよ。殺したくなる」

そう言われて視線が交じった途端、明日香の背中がぞくりと粟だった。

壁も床も黒く塗られた応接部屋に、二人。

「そんなタイプがあつてたまるか」

金縛りに近かった明日香を正気に引っ張ったのは葵だった。

茶系のスーツのポケットに片手をつ込み、残された手は未だ明日香をつなぎ止めていた。

「静谷、あんまりこいつをそっちに引き込むなよ」

「すみません」

すぐに彼は頭を下げた。ふっと葵から肩の力が抜ける。

「まあ、俺としてはお前も行き過ぎてほしくないがね」

小さく呟く葵に、十夜はただ曖昧に微笑むだけだった。

「さてと、夕飯でも行くか。奢ってやるよ」

「また七緒さんのところですか？」

「新しい情報見つけたらしい。それに俺の財布で行けるのはそこしかねえだろ？」

ギャンブル好きだが運に見放されている葵は明日香や十夜より貧しい生活を強いられているらしい。

銜え煙草をする葵の後に呆れ気味の明日香達は続いた。

「いらっしやい」

三人を出迎えたのは、クレセントの情報屋としても働く七緒だった。

昼は喫茶店、夜はバーを経営している店、ゆりかご。

昼夜では、照明が入ってお酒のビンが出たくらいしか変化は見られないが、昼間より客の入りは良かった。

「あら、珍しいメンバー」

「珍しい？ 桐原と静谷か？」

「馬鹿ねえ、葵ちゃんがいることよ。二人はさっきも来てくれたの、すぐに出てっちゃったけど」

「ふーん」

葵は照明が当たってオレンジに染まった顔を明日香達に向けるが、当の二人は何も言わなかった。

「それより、悪いニュースがあるの」

七緒の茶色の瞳が三人を映す。

彼等はカウンターに並んで座った。

「伊沢颯は警察官か」

からんとグラスに入った氷が涼しげな音をたてる。

明日香はノンアルコールのカクテルを口にしながら耳はしっかり七緒達へと向けていた。

「元、が頭につくけどね。半年前に辞職してるみたい」

気に入らなかつたのか葵は鼻を短く鳴らした。

「どうする？ このケースは滅多にないと思うんだけど」

「やるさ。うちは日本唯一の政府公認の自殺受入処なんだから」
強気な葵の言葉で、十夜の瞳に光を見たのは誰一人いなかった。

「明日香、いい加減起きなさいよお」

うっすらと明日香が瞼を開くと七緒の眩しい微笑み。

「おはよう。ホントに朝弱いわね」

「うるさい」

カフェ兼バーのゆりかごは二階建て。

一階は店として使い、二階は七緒の家として使用されている。明日香はそこに下宿していた。

欠伸を噛み殺し、七緒に悪態をつく。

「はいはい。早く支度しなさい、彼がお待ちよ」

手慣れている七緒は上手に聞き流して急かす。

彼という単語に明日香が着替える手を止めて窓に近寄ると、外にいた人物に朝から頭を抱えるはめになった。

「おはよう」

「何の用」

明日香は至極不機嫌に外で待っていた十夜を睨む。

十夜は心外だと言うように肩をすくめた。

「酷いな、偶然通り掛かったただだよ」

より一層疎ましげになる視線。

人通りのない道を二人は並んで歩いた。

「今夜だっけ？」

「……わかってて聞かないでくれる？」

ああ、ごめんねと彼は笑顔で言う。

「性分だから、しょうがないんだ」

嘘くさい十夜に明日香は睨み付けた。

「七緒さんの情報にも怪しい点はなかったの？」

「素性が詳しくわからなかったって方が正しいかもしれない。七緒さんがお上手げだって」

伊沢颯のあやふやな経歴。どれだけ七緒が調べを進めても、警察官だったことや現住所くらいしかわからなかった。

十夜は何か考え込む素振りを見せる。

「世間話は終わり。先に行ってよ」

「一緒に行かない？」

「色々面倒になるから嫌」

はつきり言い捨てた。

校内でそれなりに人気のある十夜と登校したらすぐに噂がたつだろう。人生において何事も目立ちたくない彼女にとってそれは絶対に避けたかった。

「残念だな」

さして周囲を気にしない十夜は大袈裟にため息を吐いて先に歩き出した。人が増えて二人は群衆に紛れていく。

明日香の視野に、十夜はもういなかった。

Chapter 04

「お疲れ様です」

放課後、明日香は真直ぐ事務所にやってきた。

「おー」

いつもより土気色になってソファに横たわる葵を見て呆れ顔をする。二人掛け用のくたびれたそれには葵の頭と足がはみ出ている。

「また徹夜ですか？」

「そつ、飲まなきゃやってらんねえの」

これも仕事だと彼は大声で喚いて二日酔いで頭を抱えた。

クレセントの長である彼は、たまに接待で飲むらしい。しかも半端ない量をだ。

「しんどい……」

加減の出来ない葵に内心ため息を吐きつつ明日香は資料をまとめ外へ行こうとしたがくると葵を見やる。

「二日酔いの薬ならその棚にあります。ご存じだと思いますがクライアントは午後七時に来る予定です」

時計の針は五時半を指していた。

「それまでにはもう少ししゃんとしてください」

「はいはい」

情けない手がぷらぷらと揺れるのがドアを閉める直前、彼女には見えた。

「おかえり」

ブラックルームに入って真っ先に目に飛び込んできたのは、たたずむ静谷十夜。

穏やかな声に一瞬固まっていた明日香が冷たく言い放つ。

「何してるの」

「別に何も」

そう答えて十夜は伊沢颯のファイルに手を伸ばした。

「勝手に触らないで」

明日香はそれを先に取り上げて阻んだ。どこか放心状態の彼が軽い謝罪を述べる。

ふと横に目を向けると、十夜の執行部屋のドアが開いていた。

「ちょっと風通ししたくて」

明日香の見つめる先を察した十夜が言う。

向こう側の部屋に設置されている窓も開けてあるらしく、黒いカーテンが風でばさばさと吹き込んでいた。

「興味あるならエスコートしようか？」

「結構よ」

冷めた態度で言い放つ明日香の腕を十夜が引く。二人は十夜の部屋へ。

「ちよっ、いいって言ってるでしょ」

明日香は無理矢理その手を振り払う。動揺から息を乱しつつ、目の前にいる人物を睨み付ける。

彼女の手首は赤い。

「結構とかいいって、どっちの意味もとれるんだよ」

疲れ切った瞳には、生気があまり見えない。

頭が冷めて、ようやく現状を思い出した明日香がせわしなく視線を彷徨わせる。

壁や床は契約部屋と同じように黒い。部屋の中心に置かれたベッドは、テレビで観る手術室のものに似ていた。

壁に張り巡らせた数十枚の写真が嫌でも目に飛び込んでくる。

「ここ、初めて入ったっけ？」

飄々とした彼の問い掛け。ドアに寄り掛かる十夜は明日香の行動をじっと見つめていた。

「いつもクライアントしか入れないじゃない」

「そうだったかな」

壁に貼られた写真は、殺した人間達だとすぐにわかる。

隅に置いてある一人掛けの赤いソファにもたれ掛かる彼等は、ほとんどが全裸で写っていた。

「これ、絵？」

明日香が注目したのは、左隅にある二十代の女性の写真。勿論彼女自身、生前は見覚えがあった。

命を亡くした身体のとろろに咲いた薔薇の花一つ一つに指を添えていく。

「刺青だよ。絵だといつか褪せちゃうから」

そんなこともやるのか、と言いたげな明日香の視線に十夜はふわりと笑う。

「クライアント……彼等を買う方の人からの指示だったんだ。薔薇の花を身体につて」

「痛そう」

「してみる？」

「嫌だ」

踵を返して部屋を出ようとするとベッドにぶつかりかけた。

「そこで何人死んだと思う？」

挑発を含めた十夜からの質問。

「……四十六人」

「覚えてるんだ」

ぶっきらぼうに答えると十夜はわざとらしく目を見開いた。

真直ぐな黒髪をかき上げ、苛ついた表情を浮かべる明日香。

「もう出る。あんたもさっさと準備しなさいよ」

「了解」

彼女の反応を一通り楽しんだ十夜は笑う。明日香は勢いよくドアを閉めた。

「俺は君を救うために来た」

「……は？」

初対面の人間に言われた一言に、彼女は営業スマイルを忘れて珍しく顔をしかめた。

明日香は名前を確認しただけだ。伊沢颯であるかどうか、それだけなのに。

「こんな仕事、したくないんだろう？」

伊沢颯は右手を明日香へ伸ばす。

疑問系だが確信に近い言い方をするクライアントの手を払い除けてじとりと見据える。

「触らないで」

彼の動きが止まった。

「貴方に、ここは必要ない」

「そう。俺にはまったく必要ない」

簡単に認めた男はファイル等が置かれたテーブルに浅く寄り掛かる。機密を守るためすぐに明日香がファイルを取り上げた。

「警察に偶然あった資料で調べたら、クレセントの内、二人はまだ未成年だった」

政府直結であるクレセントは概要や社員について一通りの書類を提出している。

何かのはずみで警察署に書類があり、伊沢颯に知られたらしい。

「政府がそれを認めてるのよ」

明日香はファイルをきつく握り締める。

「俺は認めない。だから自殺願望のある男を演じた」

七緒の調査が難航したのは彼が事前に予測して手回ししていたからだろう。

悔しさから明日香は下唇を噛んだ。

「元警察官に何が出来るっていうの」

「君は、こんな仕事をするために生きてるのか？」

正義感のこもった瞳が明日香を映す。

「……愚問ね」

一言そう呟いて壁に設置された電話を使う。受話器を取っただけで事務所に繋がるため、葵が怠そうに返事をしてくる。

「桐原です。クライアントは偽者でした」

「……了解。今行く」

仕事とプライベートを完璧に分ける彼は、すぐに無機質な声に変えた。

「待つんだ、君は」

「後はうちの責任者と話してください」

伸ばされた手をすり抜けて、明日香は感情のない目で告げる。

伊沢颯が何か話そうとした瞬間、二つのドアが同時に開いた。

ブラックルームのドアを開けた葵に連れられて、伊沢颯はどこかへ行ってしまった。もうどこかで会うこともないだろう。

残された明日香はもう一つの、執行部屋のドアを開けた人間がいる折り畳みナイフをぼんやり眺めていた。

「偽者か……」

ナイフを出し入れしながら独り言のように彼が呟く。

「作品の完成は延期ね」

「いいよ。これも想定内だし」

お客さんには待ってもらう、彼はそう言った。

ぱちりぱちりとナイフの刃が見え隠れする。光の角度で怪しげに輝いていた。

「それより面白い人だったなあ。僕らを助けるだなんて」

小刻みに肩を震わせてくつくつと笑う十夜。うんざりしたような顔で明日香は立ち上がった。

「今日はもう帰る。葵さんに言っというて」

「桐原」

呼び止められて嫌々ながら振り向く。十夜は笑っていなかった。

「君はこんな仕事をするために生きてるのか？」

同じ問い掛けに、ぐらりと明日香の瞳が揺れた。

「さっきは愚問だって言ってたけど、実際はどうなの？」

「……あんたなら、何て答える？」

「はい、勿論そうです。それで終わり」

清々しいほどに言い切った十夜。それに明日香が嫌味ったらしく笑う。

「はつきりしてるのね」

「三年やっててまだ迷ってる桐原も凄いと思うよ」

口喧嘩は彼が何枚も上手だ。

押し黙る明日香に十夜は優越に浸ったようににっこりと笑っていた。

「……知ってた？ この前殺した本田弥子のこと」

「殺したじゃなくて、依頼を完遂したって言って欲しいんだけど」

余計な話を交える気のない、もしくは聞いてないのか、明日香は表情を変えず話を進める。

「搜索願い、出てたって」

「へえ……そうなんだ」

十夜はナイフいじりを止めた。

「でも警察にばれたって僕らのやったことなら咎められたりはしないだろ？」

「そういうことじゃない」

「わかってるよ」

知っててわざとやるのが好きな彼。明日香は髪をかきむしった。

「可哀相な人だった。誰かに愛されてたのに自分を孤独だと思い込んでここに依頼するなんて」

窓に目を移す。室内との気温の差で、硝子は白く曇っている。

愛を知らぬまま死んだクライアントに明日香は僅かだが心を痛め

た。

「悪く言えば気付かなかった自業自得だけど」

それも確かに間違っていない事実だった。

「ねえ」

「なに？」

「……なんでもない」

何か言うつもりが思い浮かばなかった明日香。あやふやにした彼女
は再び部屋から外へ歩き出す。

「お疲れ」

「……お疲れ様」

その日明日香が最後に見た彼は、いつも通りの完璧すぎる笑顔を
浮かべていた。

Chapter: 05

伊沢颯の一件から約一週間が経った。

「お前ちゃんと勉強してんのか？」

「ほどほどには」

すっかり元の雰囲気に戻ったクレセントは、暇を持て余していた。仕事に飽きた葵が嫌がる明日香を無理矢理巻き込み世間話に興じている。

「最近は仕事ないから来なくても良いんだぜ？　うちは隠れ国家公務員みたいなもんだから月給はちゃんともらってたんだし、経費も出てる」

堂々としたお金を彼等が使えていないことは確かだ。

「葵さんは？」

「俺は長だからほぼ毎日出勤が義務なの！」

休めるんなら休みたいという嘆きの言葉を耳に入れながら、明日香は一つ提案した。

「せめて経費でソファくらい買い換えてくれませんか？」

とうとう布が破けてばねが飛び出してしまった。幸いにも二人掛けの片方のみなので、一対一の応対が多いクレセントにはそこまで困った話ではないが見栄えが悪い。

「無理。競馬で消えた」

こっそり博打で使った金を経費に回しているらしい。経理は七緒が担当しているが、上手く丸め込んだのだろう。

明日香は盛大にため息を吐き出した。

「相変わらず苦勞してるわねえ、桐原さんは」

猫撫で声で空気を変えた。呆れた中にも笑いが入っている。

「新井先生」

「ごめんなさいね。話に夢中で気付いてもらえないから勝手に入っちゃったわ」

事務所のドアからゆったりと入ってきた新井鈴香フライスズカは悪びれた素振りもなく言った。

ふくよかな彼女は高そうなツイードのスーツを身に着けている。耳には大きなダイヤモンドのピアスが飾られていた。

「これ、お土産」

有名なブランドのバッグと一緒に持っていた紙袋を渡す。それもまた、テレビ等に出ている人気のものだった。

「いつもすみません」

「良いのよお。こっちもクレセントには美味しい思いさせてもらってるんだから」

丁寧に頭を下げる明日香。それを見た新井鈴香はにっこりと笑みを浮かべる。

「先生。今日は土産だけですか？」

にやりと葵が口の片端をつり上げる。新井鈴香は短く息を吐いた。

「ホント、貴方は勘が働くわねえ」

ブランドバッグから手帳を取り出し、中のメモを一枚破る。それをひらひらと葵に見せつけた。

「また依頼したいの。これに書いてあるリストの臓器、いただけるかしら？」

「腎臓に膵臓……おっと、血液ですか」

動く紙をつかみ、やや興奮気味に葵が文字の羅列を読み上げる。

「適合するかは対象が見つかってからすぐに確認したいわ。まあ血液はよほど汚れてなければいくらでももらうけど」

「いつもありがとうございます。ちゃんと担当の奴に伝えますんで」

「担当って……静谷君だったかしら？」

曖昧な記憶を探り当てる際、新井鈴香はいつもこめかみを一定のリズムで軽く叩く。

肯定をすれば彼女はすぐさま体勢を変えてにっこりと微笑む。

「彼にはいつかうちの病院に来てほしいわね。ああ、勿論医者としてよ？ あの摘出技術って自己流らしいじゃない、見事だわ」

べらべらと喋る彼女の瞳は、爛々と輝いている。

そうして十分ほど会話を楽しんだ後、満足げに帰っていった。

「桐原、茶あ飲みたい」

「早速食べるんですね」

大雑把に包み紙を破く葵。何だかんだ言って予想済みの明日香はすでにコーヒーをドリップしていた。

「それにしても、あいつは器用にこなすよな。手術も刺青も」

明日香はぽたぽたとカップに落ちていく黒い液体を眺めつつ葵の言葉に耳を傾ける。

彼は十夜の飾る写真を何度か見たようだ。刺青を知っているのだから。

「あれが天才って奴かねえ」

「さあ……」

コーヒーを葵の前に置いた。土産のクッキーを無造作に口へ運び、しばらく沈黙が続く。

「静谷がたまに恐くなる」

「……え？」

噛み砕きながらの何気ない呟きに明日香は目を瞬かせることさえせず聞き返した。

「あいつは俺らが考えてるよりずっと先を見てんだよ。未恐ろしいねまったく……」

葵はどこか遠い目をしていた。

買いかぶりすぎだと判断した明日香は訝しがりつつも曖昧に返事をする。

「静谷にクッキー、持ってってやって」

「……私が？」

「野郎が茶あ出したって不味いだけだろ。新井先生はほぼ静谷のために買ったんだろうしな」

彼の予見は、勿論明日香にもわかっていた。静谷に会わずとも必ずクレセントにいたるとき会話に出て来るからだ。将来の期待もかなり大きい。

「たぶん部屋にいるから」

「……わかりました」

すでに三割近く減ったクッキーの中から適当に摘んで紅茶とともに彼女は席を外した。

「静谷と対等に接してるあたり、桐原も大物だよなあ」

葵の独り言は、誰かに聞かれることなく消えていった。

ブラックルームに入ると、静谷の部屋がまた開いているのがわかった。

木製の椅子に座った十夜は、窓枠に両足を乗せて黙々と本を読んでいた。

「クッキー持ってきたんだけど」

「食べる」

本から顔を上げずに指で置き場を指示する。その態度にむっとした明日香は、少々乱暴にお盆を置いた。

「ありがとう」

「……何読んでるの？」

彼がむさぼるように読み耽る本に興味を持ったらしい。ちらりと横目で十夜を見ると彼は真剣な表情を変えなかった。

「解剖関係。その本棚で気になるものがあったら貸すよ」

黒塗りの板で出来た本棚は、隙間なく埋まっていた。臓器や器官

の専門的な本や手術に関する知識の載った書物がびっしり並んでいる。

明日香が唾然としている中で間の抜けた声が耳に届いた。

「あの女医さん来たんだね。クッキーがいつもより高級だ」

手探りで土産の品をいそいそと口へ運ぶ十夜。

「その先生がいつか医者としてあんたを呼びたいって言った」

「そう」

「興味ないの？」

「うん。まったく」

あまりにはっきりした答えに、彼女は若干拍子抜けした。

「桐原だって卒業してからもここ、続けるだろ？」

「……さあ」

「俺は続ける。もう普通には戻れない」

普遍から遠ざかっていく異端なクレセント。彼等はもう進む道しかなかったのだ。

出て行こうとする明日香によく十夜は顔を上げる。

「深く聞かないんだ？」

「聞いたら私も教えなきゃいけなくなるから」

「そう」

遠回しに答える気がないと明日香は言っているようだった。

再び彼は本の世界へ浸かっていく。

「戻れない、か……」

頭に刷り込むように呟き、明日香は事務所に向けて歩き出した。

「静谷」

「あれ、葵さん？」

「俺はもう帰んぞ」

「ああ……お疲れ様でした」

ノックだけでは気付かないほど十夜は読書に没頭していた。
呆れた顔の葵はすでにコートを着込んで帰宅準備万端だ。

「今日も泊まるのか？」

「はい。帰っても誰もいないので」

「それはこっちだって同じだったの」

「そうでしたね」

拗ねたような彼の口調に十夜がふっと柔らかく笑う。

葵は小さく咳払いした。

「静谷君」

「また臓器の依頼ですか？」

葵が言うより早く重ねられた質問。それは完璧に的を射ていた。

「桐原が言った？」

「いえ、新井先生が来たとだけ聞きました。葵さんが僕を君付けで呼ぶのは仕事で頼み事があるときだけなのでカマかけてみただけです」

「なるほど」

それなら話が早いと判断した葵はコートのポケットから新井鈴香が書いたメモを渡す。

「これがリスト」

「適合しそうな人がいればやってみます」

ざっと目を通して彼は軽い調子で答える。慣れた作業らしい。

椅子と揃いの机には、臓器の絵に外国語での説明文が書かれた紙が散らばっていた。

「……聞きたかったんだけどさ」

「はい」

「お前どこで寝てんの？」

事務所には二人掛けのソファがあるため寝床として使うことも可能だが、ここには一人用しかない。

男には窮屈な代物だろう、そう予想した葵の疑問はあっさり解決した。

「そこです」

十夜は部屋の中央にある手術台を指差していた。台の真上には大きなライトが設置されている。

「死体と同じところ？」

目を丸くする葵に彼は頷く。生から死へ導く場所を彼は寢床として使っているのだ。

「はは、良い趣味してんな……」

葵にもそれは理解に苦しむらしい。笑っても片方の頬が引きつっていた。

「じゃ、お疲れ」

「葵さん」

「あ？」

「桐原、まだ気付いてないですよね」

「……当たり前だ」

ぐっと眉間のシワが深くなる。唸るような低音の声は、本当に小さかった。

「すみません」

「もし知ったら、半殺しじゃ済まねえぞ」

「それは困るな」

十夜は少し悲しそうに笑った。

Chapter: 06

「クレセント？」

「原義は三日月だと。不完全な月が自分達に似てるって理由で付けられた名前だそうだ」

居酒屋のことだ。ウミノケンイチ海野研一はビールを片手に職場の先輩である田口、内山と飲んでいた。三人は年齢も近く、親交もそれなりにある。

「自殺志願者を殺す政府直結の組織か……」

ただ飲むだけのはずがいつの間にか仕事の話に変わっていき、内山がぼそつと呟く。ブランド志向の彼は、いつも高級感ある服に身を包んでいる。どちらかと言えば熟考タイプだ。

「そこに伊沢さんが潜入したんですか？」

「あくまで噂だがな」

生ビールを一气飲みした田口は次々に料理の追加をしていく。元柔道部で鍛えた身体は今も現役で、どちらかと言わずとも即行動タイプだ。

「署内じゃ一匹狼だったから、あんまりみんな興味持ってないらしいな」

検挙率がトップだった彼の過去を、署内で知らない者はいなかった。今は交通課に移動したが、単独行動をするのは変わらず。

「どうせ上からの圧力だろ」

「圧力……」

二人の会話に遅れ気味の研一。彼も伊沢颯の経歴を耳にしている一人だ。

騒がしい周囲にかけ離れた彼等三人のテーブルは、どこか重い空

気が流れていた。

「海野、お前もう少し周りに目を向けろよ」

「確かに鈍感だな。警察官のくせに」

「くせにつて、同じ職場じゃないですか」

研一は眉尻を下げて言い返すが、新人教育だと片付けられてしまった。

「……それで、結局伊沢さんはどうなったんですか？」

一口二口酒を喉に流し込み、空になったグラスをテーブルに置いて研一が二人に尋ねる

怖い物見たさに近い好奇心。明らかにそれが彼の瞳に宿っていた。

「俺らに聞くなよ」

「つて言うより、署内で誰も知らないんじゃないか？」

「知らない？」

期待外れな回答に研一も声が荒くなった。

複雑そうな顔で互いに見合わせる田口と内山。内山からのアイコンタクトで田口は向かいに座る研一に身を乗り出す。

「これも噂だから、鵜呑みにするなよ」

巨体に似合わず小声を出す田口。話にのめり込む研一を尻目に、内山はただグラスを傾けていた。

「クレセントの内情を知った人間は政府によって存在自体を消すらしい」

「それつて」

彼の口から続きが出ることはなかった。それほどまでに、この空間には不釣り合いな血なまぐさい話だったのだ。

「ま、噂とはいえむやみに関わらないことだな」

「次は我が身つてことだ」

世間を知り、上手く共存し始めた二人は淡々としていた。

納得がいかない顔の研一はただ二人を見る。

「面白そうな話ですねえ」

妙に粘っこい声がした。田口と内山は無言で威圧、研一にいたっ

ては驚きに肩を跳ねさせる。

「ワタシも話に入れてもらえませんか？」

カウンターで飲んでいた男はネクタイをゆるめながら三人を見てにやりと笑った。

「何だ、あんた」

喧嘩っ早い田口が警戒心を露にする。

「失礼」

名刺を差し出す。近くにいた研一がそれを受け取った。

「二宮慎吾。ニノミヤシンゴしがな雑誌記者ですよ」

「話すようなことは何一つない」

田口がぴしゃりとはねのけて立ち上がる。

「悪いが失礼する」

手早く会計を済ませた内山がコートを脇に挟みさっさと店を出ていく。田口もそれに続き、研一は数秒後慌てて後を追いかけた。

不思議がる部外者達をよそに、二宮慎吾はくつくつと笑って酒を口に含んだ。

「田口さん、内山さん！」

ばたばたと物音をたて研一は二人に追い付く。

「記者に何か話してみろ。ろくなことになるのは目に見えてる」

「もうこの話はやめた方が良いな」

研一がいらない間に話がまとまったらしい。内山が息の乱れた彼を振り返って見る。

「クレセントの件は忘れよう」

「そんな……。じゃあ伊沢さんは」

「海野、自分と他人どっちが大事だ」

「それ警察官の台詞ですか」

このとき、研一は初めて田口に嫌悪の情を催した。

「警察官の前に一人の人間なんだよ」

そこで話を終わらせるような言い方をされた。

口答えする権利さえ、研一には与えられない。

「……二宮慎吾」

歩き出している二人の背中をじっと見つめて、もらった名刺をきつく握り締めた。

Chapter: 07

非番の日、研一は小さな定食屋にいた。昭和の香り漂うそこは彼にとってなかなか新鮮味のあるものだった。

午後二時の遅い昼食は待ち合わせのため。

「お待たせしました」

白髪交じりの頭で悠々と現われた二宮慎吾に研一は軽く会釈した。

「いやあ、また会えて光栄ですよ」

「……手短に話したいんです」

のんびり昼食を食べる気はない、遠回しにそう言っていた。

「ああそうでしたね。メールにもそんなようなこと書いてありましたっけ」

強気な言葉にあまり動揺した様子もない。二宮慎吾は重い身体を背もたれに預けて品書きを眺めている。老眼なのか品書きとの距離が遠い。

「何食べます？」

「食べてきました」

「そうですか。おばちゃん、日替わり一つね」

水を置いてすぐ厨房へ隠れた店員に慣れた様子で二宮慎吾は声を張り上げた。

「で、何か気になることが？」

「先日居酒屋で会ったとき、何かを知ってるように見えました」

田口らと揉めそうになったときの彼の態度が研一は頭から離れなかった。

だから誰にも相談せず黙って目の前の記者に連絡を取ったのだ。

「二宮さんはクレセントについて何か知ってるんですか」

「海野さん、でしたか？」

「はい」

「失礼ですが、いぶん警戒心のない方だとお見受けします」

唐突な批判に研一は目を瞬かせた。

静寂の空間に割烹着を着た店員が割り込む。キツネ色に上がった
アジフライはふわりと湯気がたっていた。

「クレセントは一般人には知られていない情報。それを簡単にマス
コミへ流すような行為は止めた方が良い」

「流すなんてそんな……」

「現に今、こうしてワタシに話してるじゃありませんか」

二宮慎吾はドラマで取り調べをする刑事のように研一を追い詰めていく。

「もしもワタシがそれを知らなかったらどうするつもりだったんです？」

「……すみません。浅はかでした」

言い訳もせず謝罪した。愚かさを痛感したのか、その表情は暗い。
短く息を吐いて二宮慎吾は割り箸を手にする。

「貴方は幸運な人だ」

「え？」

「ワタシが知ってることすべて、教えてさしあげます」

出来たてのアジフライにかぶりつき、記者はにやりと意地の悪い
笑みを見せた。

最寄りの駅から約三十分歩いたところに研一の目的地はあった。

「ここか……」

オフィス街から少し離れた位置にある公園は、一部ホームレスの
住居としても使われている。

しばらく歩き回った研一の前には青いビニールシートで作ったテ

ントがあり、面影のある人物がしゃがんで何かしていた。

「伊沢さん、ですか？」

男の前に立って尋ねる研一。彼に視線を合わせようと腰を曲げると、伸びた髪に邪魔された虚ろな目が見えた。

研一は確認しただけだ。伸び放題の髪や髭に泥で汚れた身体で本当に自分の目が正しかったのかどうかを。

「やめろ」

鋭い声に勢いよく後ろを振り向いた。

伊沢に似た風体の四十代くらいの男は肩に担いでいたゴミ袋を地面に置いた。一帯を仕切るリーダーなのだろう、周りの仲間の視線が研一達に集まっている。

「そいつは話せねえよ」

「話せない？」

「ここに倒れてたとき、もう何も喋れなかった」

介抱したのも現在面倒を見ているのもおそらく彼なのだ。

赤の他人でもここでは家族同然。幾分か心配そうに伊沢颯をみていた。

「兄ちゃん、こいつの知り合いなのか？」

「いえ……知り合いに、似てただけみたいです」

石像から目を離すことが出来ずに研一がぼんやりと答えた。

「すみませんでした」

顔見知りだったにもかかわらず彼は他人だと言った。そうするべきだとなんとなく感じたのだろう。

二人に深く頭を下げて、公園の外へ頼りなげに歩く。

「駄目だったでしょう？」

近くのベンチに座っていた二宮慎吾はベージュのコートのポケットに手を突っ込んだまま研一に近寄る。

「話せなくなるほど、酷い扱いを受けたようだ。何もわからず終いで困りましたね」

持ち前の行動力で見つけた手掛かりの閉口に記者は白い息を吐き

出した。

「あんなに、なるんですか……」

「場所を変えましょうか」

相当参っている研一の姿に、彼はすぐさま提案した。

「ちょっと刺激が強すぎましたかね」

伊沢颯の居場所を教えた二宮慎吾は苦笑しつつコーヒーを口に含んだ。

どこか聞き覚えのあるクラシックが流れる小さな喫茶店に、客は彼と研一の二人だけ。店主も注文の品を渡すと奥に引っ込んでしまった。記者は何度か訪れていて顔馴染みらしい。

「あまり慣れてないんですね」

移動中からうつむいたままだった研一がぱっと顔を上げる。青白く情けない顔だった。

「ああ、気を悪くされたのなら謝ります。ただ……今の世の中を貴方は少しも知らないように思えるんです」

「確かに俺は世間知らずです。認めます」

真摯に受け止める。それが研一の強みだと二宮慎吾は思った。

つい先程までの青白さが一変して警察官の顔つきになっている。

「だからこそ知りたいし、知るべきだと思うんです」

「お気持ちは充分わかりました。まあワタシにとってもクレセントは興味深い件ですからね、最後まで付き合いますよ」

「ありがとうございます」

研一はほっと肩を撫で下ろした。

ふと店内の曲調が変わる。

「さて、今度はワタシからお願いします」

「え？」

「ワタシは貴方にほぼすべての情報を伝えました。それで海野さん

の気持ちは晴れるかもしれませんが、こちらへのお返しがまだです」にやりと悪戯っぽく笑う。

「マスクミがただで警察に情報を教えると思いましたが?」

「それは……」

確かに有り得ない話だ。そもそも犬猿の仲に近いはずなのに。

指摘に答えられず研一は言い淀む。

「ギブアンドテイク、でしょう?」

渡した価値相応の対価を出せと彼は言っているのだ。二宮慎吾はそれが目的だった。

「俺は情報なんて何も」

「わかってますよ。ワタシだって馬鹿じゃあない」

新人警察官の台詞が嫌でも予想出来て記者は口端を更につり上げる。

「この話の行く末です」

「行く末?」

研一は聞き返す。

「そう。貴方はきっと必然的にクレセントの事件に巻き込まれるでしょう。現にもう、彼等の存在を知ってしまった。後には退けません」

「大丈夫です」

どこから来たかわからない研一の自信。

今度質問を投げ掛けたのは二宮慎吾だった。

「と、言いますと?」

「最後までついていきます。クレセントなんて、あったらいけないんだから」

「そうでしょうか」

「え?」

クレセントを絶対悪と言い切ったが否定的な意見に目を丸くする。「近年、この国の人口は増え続けています。いずれ世界でもトップになるかもしれません」

嫌な笑みは消えていた。固くなった表情から読み取れるものは何一つない。

「それとクレセント、どう関係するんですか？」

「人が増える分、欲や闇の部分も増します」

すでにクラシックは彼等の耳には入っていない。

「死にたがる人も増えたでしょう。それなら殺せば良い、人数が減って一石二鳥だと政府は考えたんですよ」

「殺すのはクレセントに任せているんですね」

「まあ、彼等には関わりたくない汚点なんですよから」

苦虫を噛んだような顔の研一。汚れ役を他人に任せて堂々と国民に演説する政治家に吐き気すら覚えた。

「貴方がそんな顔をして何も変わりやしませんよ」

「……わかってます」

若干不機嫌な表情になりながら、研一は冷めて温くなったコーヒーを口に運んだ。

Chapter: 08

「また吸ってるの？」

「別にいいでしょ」

寒い中で窓は開けてるんだからとでも言いたげな明日香。

ブラックルームを隔てるドアは今日も開放、というより最近ほぼ毎日開いている。十夜は自室の窓から明日香の煙草の煙と夕日をぼんやり眺めた。

「煙草って周りにいる人の方が毒なんだって」

「じゃあそばに寄らないで」

冷たい一言だが十夜は慣れたようであまり表情を変えない。

「……桐原ってさ、誰を一番信用してる？」

独り言のように小さな声だが、無音に近い環境で自然と明日香の耳にも届く。

「急に何、意味がわからないんだけど」

「結構付き合い長いけどさ。あんまり僕は信用されてない気がする」

「あんただって私を信用してないでしょ」

「まあね」

互いに詰まらない距離感。どちらも縮まることは望んでいない。

「自分自身と死体だけかな。僕の信じるすべては」

身体についた二つ手のひらを見つめて十夜は呟く。

「死体は裏切ったりしないから」

「……そうね」

明日香が長く吐き出した息は灰色だった。寒い空気が触れているせいか、夕日のせいか鼻がほんのり赤い。

「でも信じるものが死体だけなんて、悲しいと思うけど」

「……意外。桐原がそんな台詞言うとは思わなかった」

窓から明日香へ視線を移動し、声をやや弾ませる。

率直な感想を言っただけの本人は面倒くさそうに黒髪をかきむしった。

「馬鹿にしてる？」

「いや？　むしろギャップにときめいた」

「……最悪」

煙は十夜に向けて放たれた。彼は煙さから僅かに眉間を寄せる。

「桐原が煙草なんか止めたら、信じるものに入れてあげるよ」

「死体と同じなんて真っ平ごめんよ」

短くなった煙草を灰皿に潰して立ち上がる。

お世辞にも控え目とは言えない乱暴なノックがブラックルームの静寂を壊した。

「休憩中悪い。ちょっと良いか」

葵の伸ばしっ放しの髪は一定の方向に跳ねていた。とろんとした目が寝起きであることを物語っている。

それでも彼は明日香達の前に立った。

「この中に知ってる名前、いるか？」

「何ですかこのリスト」

ワープロで書かれた数枚の書類。名前とその上に振り仮名があるだけで百人近い数がそれに列となって連なる。

初めて目にした書類に明日香は訝しんだ。

「ちよっとな。で、どうだ？」

「……特にいませんけど」

うやむやにされたことに不満げな明日香の横に来て書類をのぞき込む十夜。彼の部屋は閉まっていた。

「今のところ僕の知り合いにはなってませんね」

「そうか」

「これ、クレセントに近い人間のリストじゃないですか？」

「相っ変わらずお前鋭いな」

予想はしていたが感心と呆れが交ざったような笑みを葵は見せた。
「どういうこと」

書類を持ったまま明日香が十夜に尋ねる。

「僕は闇の存在。だから知られたら国としてはかなりまずい」

喋りながら近くにあった灰皿に顔をしかめてなるべく遠ざけた。

十夜は煙草の臭いがあまり好きではない。

「いつも政府でそういった調査をしてるんだ。クレセントを知ってしまう一般人がいるかいけないか」

「もしもいたら？」

「話せないようにするまでだよ」

「な……っ」

コンビニへ行く、十夜の口調はまるでそう言っているように軽い調子だった。

知らなかった事実には驚いた明日香は息を飲む。

「おい静谷！」

予想外の展開に葵が声を荒げる。

「葵さんも人が悪いですよ」

「あ？」

「三年働いてる桐原にずっと黙ってるなんて」

数秒の沈黙。戸惑いを隠せない明日香が視線を彷徨わせる。

顔をぐしゃぐしゃに歪めた葵は近くにあった椅子を蹴り飛ばして出ていった。

「桐原」

十夜の呼び掛けに彼女は肩が跳ねる。

「わかったろう？　僕らはもう、抜け出せないところにいるんだ」
政府と内部以外に近い人間がいてはいけない。

明日香の脳裏に元警察官と名乗った偽者のクライアントが過ぎった。

「この前来た、伊沢って人も……」

先を言うことは出来なかった。知ることすら恐怖なのだ。

「それが政府との約束だから」

「何で、何であんたは知ってるの」

彼女は十夜につきみ掛かる。彼のシャツの胸元をきつくつかむ手が微かに震える。

「前にも何度かあったんだ。葵さんに聞いたら渋々答えてくれた。桐原に黙っておく約束だったけど」

平然とする十夜から明日香は腕をつっぱねて離れた。背を向けて黒いカーテンを握り締める。

「クレセントって」

普段とは違う弱々しい彼女の声。

「存在する意味、あるの？」

「……さあね」

小さな背中を見つめ、十夜は曖昧に笑った。

小気味良くドアにつけたベルが鳴った。唯一の客が去った一時間後のことだ。

珍しい客に七緒は目を瞬かせた。

「葵ちゃんたら、まだ喫茶店の時間なのに来たの？」

「ウイスキー」

カウンターに座り手短に注文を告げた。伸びすぎた前髪であまり表情が読めない。

「……アタシの話聞く気ないみたいねえ」

どこから見ても沈んだ様子の彼に七緒は深々とため息を吐いた。

「はい。どうぞ」

「これコーヒー……」

「まだ時間じゃないって言ってるでしょ」

睨まれてようやく我にかえった。

「悪い」

「良いわよ。お客来なくて退屈だったから」

七緒はふわりと表情を和らげるが葵は暗い顔のまま。

「何かあった？」

「桐原に、全部知られた。静谷がべらべら言っちゃった」

「……そう。あの子が帰ってきたら質問攻めになっちゃうかしら」
要領よくまとまっていけない葵の説明を、七緒はすぐに理解した。
長い付き合いは本物らしい。

くすりと零す七緒の笑い声は困った今の状況を楽しんでいるようだった。

「その様子だと、静谷君に何か言われてここに逃げて来ちゃったんでしょうからね」

「だから悪かったって」

居心地が悪そうに彼は椅子を座り直す。その様子に七緒がまたくすくすと笑った。

「葵ちゃん、まだ精神的に弱いねえ。……彼が強すぎるのかもしれないけど」

無言で彼はコーヒーを口に運ぶ。

七緒は結わえていた金髪を解いた。さらりと髪が音をたてる。

「何にせよ明日香には悲しい思いさせたくないわね」

「……そうだな」

二人の気持ちは同じだった。

「さ、コーヒー飲んだらとっとと事務所に帰ってちょうだい」

「酒は？」

「馬鹿ねえ、仕事抜け出して来たんでしょ？ 終わるまでは駄目」
長い腕を伸ばして葵の胸板にとんとんと指をたてた。七緒はすべ
て見通していたようだ。

説教に近いそれに、ぎこちなく葵は唇を歪める。

「助かるよ」

「何が？」

「俺がどんな状態でもいつもお前は普通に振る舞ってくれる」

「何年付き合ってると思ってるの。当然でしょ」

ゆったりとした時間は、喫茶店からバーに変わるまで続いていた。

「七緒さんも知ってたの？」

「早く帰ってきたと思ったら、恐い顔してどうしたの？」

淡いオレンジの照明が店を彩っていた。時間帯はバーに変わっている。

肩をいからせてクレセントから帰ってきた明日香に七緒は首を傾げる。理由を知っての行動だ。

空いているカウンターにカバンを叩き付けるように置く。

「答えて。葵さんが来たでしょ、話はもう聞いているはずよ」

「……ばればれじゃないの」

簡単に見透かされる友人に呆れて小さくぼやく。

「今は仕事中的なの。終わったら話すから、上に行なってなさい」

珍しい七緒の強い口調に押されて、彼女は渋々二階の部屋へ上がった。

「待たせちゃった？」

「別に」

バーの片付けを終えると午前二時をまわる。程よい疲労感で二階のリビングに帰った七緒を明日香が待っていた。

感情のない濁った彼女の瞳が七緒を映す。

「そんな顔しないでよ。ちゃんと質問には答えるから」

カーペットに座っていた明日香の正面に七緒が腰を下ろす。

「クレセントを知った人間の末路、七緒さんわかってたんでしょ？」

何で言ってくれなかったの。三年以上、一緒に働いてるのに」

「もしアタシが真実を言ったら明日香はどうした？」

「それは」

「特にどうも出来ないでしょう」

七緒は明日香の言い訳を聞き入れることなく言った。

白いテーブルに肘をつき、両手を絡める。

「非情でもスムーズな仕事を求めるクレセントに、貴方は優しすぎる」

「そんなことない……！」

現実を突き付けられた。明日香はテーブルを叩いて立ち上がる。

「じゃあその動揺は何？」

怒りを滲ませたような七緒の瞳は不安定に揺らいでいた。

「辞めても良いって言いたいところだけど、国から何をされるかわからないわ。内情を漏らされたら困るからその前に殺されるかもしれない」

一気にまくし立てて七緒は息をつく。

クレセントに深く関わってから離れることなど、簡単には出来ないのだ。

「辞めない」

「え？」

「クレセントに入るのを決めたのは私自身だから最後までやる」

はつきりとした口調で紡いだ。先程とはまったく違う、曇りのない瞳。

「クレセントがなくなるか、私が死ぬまで」

「その頑固さ、絵理子さんそっくりね……」

しみじみと七緒は呟く。微かに懐かしんだ柔らかい笑み。

「母さんの名前は出さないで」

「あら、ごめんなさい」

空気を変えようと七緒はぐっと伸びをする。明らかな疲労が明日香にも七緒にも見えた。

「煙草一本もらえる？」

「吸うの珍しいね」

常備している煙草と携帯灰皿を渡すと短い札が返ってくる。

滅多に見れない光景に明日香の心情が無意識に言葉となって出て

いた。

「明日香と同じよ。精神安定剤」

独特の味に最初は眉をひそめたが、しばらくすると慣れた様子で煙を吸い込む。

「他に質問はあるかしら」

「もう充分。ありがとう」

「崩れ始めたかしらね……」

明日香が自室へ向かい閉まっていくドアを見ながら七緒は煙をくゆらせた。

Chapter: 09

二週間ほどの正月休み前に行われる学生の重要な試験。

明日香達の高校では玄関に入ってすぐ成績上位者の名前が張り出されているのだ。

わらわらと人込みに揉まれる中、明日香は成績上位者を見ることがなく教室へ進もうとする。

「十番に入ってるなんて凄いね」

「……学年一位がそれ言わないでくれる？」

いつ背後にいたのかわからないものの、動揺を隠して冷たく言い放つ明日香。

「それに、校内では話し掛けないでって言うてるでしょ」

十夜は悪びれずにごめんと告げて明日香を抜かしていった。

短いため息が不意に出てくる。

「おはよ、明日香」

「美穂」

明日香の肩を叩いたのはクラスメイト兼友人の蓮見美穂。ハズミミホ限り無く黒に近い茶髪は肩より上の長さでパーマがかかっている。

「どうしたの？ 暗い顔しちゃって」

「何でもないよ」

明日香は作り物の笑顔を見せる。美穂はそれを信じた。目元の泣き黒子が印象的な彼女は朝から満面の笑顔だ。

「ねえ、さっき静谷君といた？」

くりくりの丸い目が獲物を求めるようにぎらつく。何かを企む顔だ。

「どうして？」

「それっぽい人が見えたから」

「残念ながら挨拶されただけ。テスト凄いなって」

彼女に下手な嘘は通用しない。明日香は無難に納得させる答えを述べた。

期待外れだった美穂は小さめの唇を尖らせる。

「なんだ、つまらないな。面白いニュースだと思ったのに」

「また記者みたいなこと言ってる」

「一応目指してるからねえ」

高校入学当初から、美穂は誰に自己紹介をするときも新聞記者になりたいと公言していた。

勿論明日香も言われた一人だ。

「今新しい記事書きたいんだ。社会的な何か」

前向きで意欲的な美穂に明日香は微笑む。

「頑張るね」

「そりゃあ夢への一步ですからっ」

楽しそうな美穂にどこか羨望のまなざしを浮かべ、明日香はひっそりとため息を吐いた。

「もう後戻り出来ませんよ。本当によろしいですか？」

「はい……っ」

今日のクライアントは三十代の主婦だった。順風満帆だった結婚生活が、一時の気の迷いで行った不倫行為に壊された哀れな女性。

離婚と慰謝料の請求に加えて、不倫相手からの一方的な別れ話を聞かされた彼女は精神的に参ってしまい、人生の選択肢をクレセントへ向けたのだ。

「では、こちらの書類にサインを」

震える手で書かれた名前は歪んで見えた。

「あちらに担当者がおります」

執行部屋に消えたクライアントを見送った明日香は壁に背を預けて煙草に火をつける。

最初の煙を吐き出したところで葵が入ってきた。

「一日で二件は流石にきつかったな」

「仕方ないですよ」

十夜の暴露話の一件以来、僅かに違和感があるが前と変わらず葵は明日香に接している。

そして明日香もほぼ以前と同じように葵に話し掛けていた。

「桐原。帰り送ってやろうか」

「大丈夫ですよ。十分くらいで着くんだし」

コートを着込んで赤いマフラーを首に巻く。帰り支度を済ませた明日香は葵の申し出をやりわりと断った。

「それは俺だって知ってるっての。ほらあれだ、最近変質者が多いらしいから危ねえだろ？」

確かに女性が襲われる事件は多い。騒ぎに関心を持たない明日香でも何度か耳にしていた。

「護身用のスタンガン持ってますから。私を心配するくらいならとっとと仕事片付けてください」

コートのポケットから黒い小型機械を取り出し、ばちばちと光らせる。

書類の山がほんの数時間で片付くとは到底思えず、こちらに回ってくるのは絶対に嫌だと彼女は目で訴えた。

「……了解」

アイコンタクトを受けた葵は両手を上げて降参のポーズをとる。

短く挨拶を告げて、明日香はクレセントから出た。

「はあ……」

ため息が冷えた空気で白く変わる。

家まであと数分で到着する。人通りのない道を早足で歩きながらマフラーを顔にうずめた。

「君、ちょっと」

背後から呼ばれてぴたりと足を止める。周りにいる人間はいない、呼ばれた明日香と呼んだ男だけ。

革靴の足音が大きくなるまで獲物という名の敵を引き寄せる。近付いたと感じ取り、ポケットから例のスタンガンを取り出して相手へ素早く向ける。

「うわっ！」

ベージュのコートを着た男はまだ若いサラリーマンのように見える。

勢いよく飛び退いたと思うと、明日香に向けて黒い手帳のようなものを開いて見せた。

「待った待った！」

「……警察？」

警官の制服をきっちり着こなし、堅苦しい顔を浮かべた男の写真正は目の前の人間と同一人物だった。表情は写真とはまったく違ったが。

「そ、そう！ だからそれしまつて」

「何か用ですか？」

言われた通りにポケットへしまう。睨むような明日香の視線に警察官は若干たじろいだ。

「こちら辺を一人で歩くの危ないよ。物騒な事件が多いから警察も見回りしてるんだし」

「普段はもう少し早く帰ってます。それにこの道を通らないと家に帰れないんで」

「そう。まあスタンガンなんか持つてるなら大丈夫そうだね」

呆れと安心の中間のような微笑み。明日香はもうことは済んだと思ひ再び歩き始めようとする。

「あと、間違ってたらごめん」

しかしまだ話は続いていた。

「君から煙草の臭いがあるんだけど」

「……バイト先で髪に臭いがついたんじゃないですか」

今日は確かに吸い過ぎていた。一日二本程度のはずが、仕事の量も重なり倍は吸った。

ありがちな言い訳を告げて嗅覚の鋭い警察官を冷たくあしらう。

「もしかして俺、嫌われてる？」

「警察が嫌いなだけです」

昔の記憶が、さざ波のように押し寄せてくるのを彼女は感じていた。

ポケットの中できつく拳を作る。爪が食い込むくらい強く。

「結構傷付くな」

へらりと彼は頼りなく笑った。

どうでもいいと言わんばかりに明日香は大きく息を吐き出す。

「一応身分証見せて」

「何ですか」

「そういう形式なんだよ。悪用する気はないから」

予想以上に手間取る会話に半分投げやりな態度で学生証を渡す。

「桐原明日香さん、ね」

見たと判断してすぐに奪い上げてさっさと警察官と距離を開ける。

「あ、ちよつと……！ 愛想ない子だなあ」

そう呟く警察官を無視して、明日香は七緒のいる店へ帰宅。

「おかえり、遅かったわね」

「仕事と職質」

「そう。仕事と職質……職質？」

流すように聞いていた話に不可解な単語が紛れていた。

七緒がそれに気付いたときには、明日香はもう部屋に向かっていて姿が見えない。

「ちよつと明日香、職質って何やったの！」

まだ客がいることを気にする余裕もなく叫んだ七緒だが、彼女からの返答はなかった。

部屋に入ってコートを脱がずに明日香はベッドへ倒れ込む。

「海野研一……」

天井を見つめ、無意識に手を伸ばす。

「要注意人物」

何もつかめない手のひらは、ただ空中を彷徨っていた。

Chapter..10

それは昼休みのことだった。美穂に昼食を誘われた明日香は七緒手製の弁当を手にしち上がる。

一階の隅にある非情階段近くの段差に腰掛けて、さて食べようと弁当の蓋を開けた瞬間に、美穂は言い出したのだ。

「クレセントって知ってる？」

「……何それ」

動揺を押し殺して明日香は興味なさげに問う。

「パソコンで色々ネタ探ししてたら見つけた。自殺したい人を代わりに殺してあげる政府公認の特別組織だって」

人の寄らないそこは昼間でも薄暗かったが、美穂の瞳は好奇心により輝きを放っていた。

「ほとんどの内容が非公開で謎に包まれてるんだけど……面白そうだと思わない？」

「興味ないな」

胡椒のきいたポテトサラダを無理矢理喉に流して短く答える。

これ以上彼女に知られては色々ややこしくなり迷惑なのだ。

「そっかぁ。明日香なら興味持ってくれる気がしたんだけどなぁ」

「何で？」

「さぁ、わかんない」

曖昧に笑う姿は、十夜とどこか似ていた。

「とりあえず調べてみる。色々情報わかったら教えてあげるね！」

ころころと変わる美穂の表情を眺める。ふと浮かんだ疑問をすぐ目の前の相手にぶつけた。

「美穂。それ他の人に言った？」

「まさか、気味悪いって嫌われるのがオチじゃん。明日香はそういうの平気っぽいから」

それを聞いて明日香はほんの少し安堵する。これ以上クレセントに関わる人間が増えるのは避けたかった。

伊沢颯がまた彼女の脳裏をかすめていく。

「……自殺したい人を殺すって、どうなんだろうね」

呟いた独り言に近いそれは美穂の耳に届いていた。

「あたしは難しいことわかんないけど、依頼して死んじゃった人の家族はクレセントを恨むんだろうね」

「……そうだね」

クライアントの大半は孤独な人間だ。しかし中には家族がいたケースだってある。そのときは、政府から見舞金としてそれなりのお金が動くらしい。

それで解決してしまう大人達の闇にどっぷり浸かってしまった明日香は自分を疎ましく思うこともあった。

「さて。頑張ってスクープ見つけなきゃ！」

未来に向かって進む人間に接しているとより一層感じるのだ。自分に輝かしい光を見る術がないと。

「明日香はこの後どうするの？」

今日は上級生の進路面談で授業は半日のみ。美穂が首を傾げると茶髪がふわりと揺れた。

「真直ぐ帰るよ。下宿先の手伝いしなきゃいけないから」

「そっか、頑張ってるね！」

「美穂もね」

笑顔で別れて真直ぐクレセントの事務所へ行こうとした明日香だが、十夜が同級生と話す様子に身を隠した。

「流石について来られると困るんだけど……」

「ごめんなさい、それは謝る。でもあたし本気なの」

明らかに付き纏っている様子の女は押し付けがましい視線を十夜へ浴びせた。

明日香のいる位置からは十夜本人の表情がよく見えない。

「気持ち嬉しいけど、今はそういうの興味ないんだ」

静かな十夜の拒否。はっきりとした言葉を聞いたのは初めてだったらしい。

ショックを受けた彼女は放心状態でふらふらと来た道を戻っていた。

「盗み聞きに盗み見なんて趣味悪いよ桐原」

「あんたが堂々と道のと真ん中で話するのが悪いんでしょ」

「それもそうだね」

開き直る態度の明日香に十夜が笑う。進む彼らの会話はテンポが良かった。

十夜の数歩後ろを明日香は歩く。

「蓮見さんて、新聞部だっけ」

「……そうだけど」

急な話題に怪訝な顔をする明日香。

「それがどうかした？」

「別に。ただリストに載る気がしてさ」

事も無げに言う彼に、彼女はぴたりと足を止める。

氷のように冷たい風が二人の距離を通り抜けていった。

「友達だよ。何か知ってる？」

十夜の問いに首を左右に振る。

決定的な証拠があるのか、それともただの当てずっぽうなのか。どちらにせよ明日香にとって悪い状況だった。

「そう。でも今ならまだ間に合うかもね」

彼特有の含み笑いに明日香の表情が一気に陰しくなる。

「知ってて聞いているんだ」

十夜は肩をすくめて笑う。

「僕がそういう性格ってわかってるでしょ？」

「悪趣味」

「何とでも。……どうするかは、桐原次第だよ」

先に行ってしまう自分より大きな背中を見つめ、ぐっと拳を握り締めた。

「桐原さん？」

「そんなところで何してたの」

新井鈴香だった。彼女が後部座席に座る黒い車は鈍く輝きを放っている。

歩道にいた明日香の脇に停車した黒い塊が口を開ける。

「これから仕事でしょう？ 乗って。事務所の前まで送るわ」

十夜と同じ道を歩きたくなかった明日香は軽く頭を下げてから乗車した。

走り出してすぐに新井鈴香が口を開く。

「あたし達、嫌な仕事仲間よね」

嘲るように彼女は唇を歪める。

運転手がバックミラー越しに二人の姿を見ていた。

「知ってる？ この空の下で今も人が死んでるの。医者が必死に助けてる患者の倍近くが、生きることがをやめようとしてる」

「たまに思うんです」

しばしの沈黙の後、明日香がぼつりと呟く。

「こんなどす黒い世界、消えればいいって」

「……思うことは結局、皆同じなのかもしれないわねえ」
車で流れる景色を眺める明日香は、何も言わなかった。

「ずいぶん大人びた子ですね」

事務所に下ろして再度走り出す車内で、低い声が紡いだ。先程まで無言を貫いていた運転手だ。

「あの子はもう充分大人よ」

広い後部座席で新井鈴香は足を組み替える。

「でもまだ大人になりきれてない」

運転手にはせせら笑う彼女の真意が読み取れなかった。

「また仕事が入った」

事務的な上司の声に、気乗りしない明日香が言葉をかぶせる。

「今回のクライアントは？」

「吉沢佐和子、六十五歳の女性。現在は老人ホームで生活してる。噂で聞いたのを老人ホームの所長に頼み込んだらしい」

慣れた手つきでネクタイを緩め、書類を自らの机に放り散らす葵。そこまで歩み寄り書類に目を通す。決行は一週間後だった。

「その所長は、クレセントを知ってたんですか？」

「いや。言われてから調べたらしい」

「じゃあ政府に」

「深く立ち入る気はないらしい。大丈夫だ」

明日香が不安げに見えたらしい。力強く彼は頷いた。

「それに、老人ホームも今は人員削減を目指してるところが多いからな。丁度いいとも思ったんだろう」

追い出す必要のあった人間が一人減ったということか。

顔を曇らせた明日香は何も言わない。

「無理なら代わりに俺がやる」

「出来ます、問題ありません」

「そう。じゃ静谷にも知らせてやって」

「……わかりました」

ブラックルームに移動しようとドアを開けると何かに阻まれた。

「次は老婆か」

考え込む動作をする十夜の手だ。

後方に座る葵はそれにまったく気付かず吞気に歌を口ずさんでいた。

「立ち聞き？」

開閉しようとドアに力を入れるが微動だにしない。明日香と十夜の力は歴然の差だった。

嫌味っぽく尋ねる明日香に彼が笑う。

「偶然ね。蓮見さんのこと、決めた？」

「……あんたに関係ないでしょ」

それがほんの一時時間前の出来事。

「明日香？」

「え、あ……」

「考え事でもしてた？」

「ごめん」

「いいよいいよ。それで、何の相談？」

ファーストフード店で向かいあって二人座る。美穂はストローをいじりながら明日香に聞いた。

「美穂さ、クレセントを調べてるって言ってたじゃない？」

「うん、でもほぼ謎。パソコンでサイトまで見つけたんだけどパスワードがいるみたいでさ。概要が全然見えないの」

お手上げと言わんばかりにテーブルに突っ伏す美穂。

「私も、色々調べた」

「え？」

意外な言葉に美穂がぱっと明日香へ視線を戻す。

「あんまり良い話は聞かない。……詳しく調べたら駄目だと思う」
そこまで言って明日香は顔を伏せた。

「嬉しい」

「え？」

今度は明日香が目丸くする番だった。

照れながらも満面の笑みを見せる美穂は続ける。

「心配してくれてるんでしょ？　ありがとう！」

しかし美穂はふっと笑顔に影を落とした。

「でもごめん。調査はやめられない」

「どうして？」

「諦めたら真実がうやむやになっちゃうから」

「……そう」

真直ぐな瞳に明日香は情けない相槌を打つしか出来なかった。

「ちよっとトイレ行ってくるね」

「うん」

姿が見えなくなったのを確認してからテーブルに顔を沈める。脇にずらしておいたオレンジジュースの氷が涼しげに鳴いた。

「……第一段階は失敗か」

明日香はすでに次の策を練り始めていた。嫌いになれないただ一人の友人を、クレセントから遠ざけるために。

Chapter..11

署内の書類倉庫の床に、海野研一は倒れた。

「田口！」

内山の叱責する声が部屋中に響き渡る。研一は田口に左頬を殴られた。

「お前……自分が何してるかわかってんのか」

息を乱し、怒りに肩を震わせる田口の顔は真っ赤になっていた。寝転んだ状態から研一が上半身を起こす。歯を食いしばる余裕も与えられなかったため、唇が切れて血が垂れた。

「クレセントは忘れろ、そう言ったよな」

「田口やめろ」

伸ばした腕は研一の胸倉をつかみ揺さぶる。内山が二人の間に入って止めようと試みるが腕力は田口が上。容易に振り払われてしまった。

「あの居酒屋にいた記者と会ってんの見たんだ。驚いたし、すぐ殴ってやろうかって思った」

偶然の出来事だった。非番だった研一を聞き込み帰りの田口が見つけたのだ。

彼の怒りは後輩を心配するもの。

「伊沢さんがクレセントに関わってどうなったか、わかってんだろ海野！」

「わかってます」

怒鳴り声を張り上げる田口に、うつむいたまま研一が語る。

「会いました。二宮さんに教えてもらって、伊沢さんに会ってきました」

「どこにいたんだ」

これには二人も驚いたらしい。緊張感を含んだ内山の声が先を急かす。

田口の腕は内山がつかんでいたが当人自身暴れることを忘れたように動かなかった。

「公園で、ホームレスになってました。言葉を話せなくなってたんです、伊沢さん」

初めて聞く話に内山と田口は息を飲んだ。

「国の秘密を知ったら人権を無視して言葉を忘れさせるような真似しても良いんですか」

静まり返る倉庫。人工の明かりが三人をただ照らしていた。

「こんな世間を良いと思ったことなんて一度もない」

唸るように内山が呟く。太股の真横にある拳はわなわなと震えていた。

「だが一般の警察官に何が出来るって言うんだ」

「たとえ一般でも、集団になれば……！」

「国に齒向かう国家公務員がいるか？」

内山の問いに研一はぐっと喉に言葉を詰まらせる。

「諦めろ」

一人取り残された研一の心に重く暗い闇が広がった。

「あ……」

怪我の手当てをした研一は仕事に戻った。訝しる上司に笑顔で誤魔化し見回りに入ると警察嫌いの明日香に偶然出会う。

「こ、こんばんは」

引きつった顔の挨拶にうさん臭さを感じた明日香がポケットに手を入れる。取り出すものはただ一つ。

「違うよ、たまたま通り掛かっただけで別にストーカーみたいなこ

としてないから物騒なもの出さないで！」

必死な説得に彼女は無表情で見つめる。ポケットにもうその手はない。

「いつもこんな時間に帰ってるの？」

「バイトですから」

「そう、なんだ」

陰鬱な雰囲気全体にまとう明日香に若干惑う研一。

する必要のない会話すらまったく弾まない状態だ。

「仕事、上手くいってないんですか」

「……何で？」

初めて話しかけられた研一は間の抜けた顔になって質問を質問で返す。

「顔」

その一言だけだった。殴られた傷のことを指しているのだろう。

徐々につかんできた明日香の難しい性格に研一は苦笑した。

「見えないように見えてる、そんな敵と戦わなきゃいけないんだ」

自らの手のひらを見つめる。武骨とは程遠い華奢な手。

何故自分が話そうと思ったか研一にもわからなかった。しかしもう止まらない。

「俺の力は小さいから同盟を組もうと思った。でも周りはそんなことは出来ないって言う」

諦めた内山の顔がちらついた。

「難しいよ……って、君に愚痴ってもしようがないよね」

情けない笑い声が妙に道に響く。呆れて立ち去られてしまうと思っていた研一は聞いていた明日香に少し好感を持った。

「いつか変化があるかもしれない」

「え？」

「貴方と同じ意志を持つ人が現れたり、敵が勝手に消えるかもしれない」

淡々と紡ぐ言葉は、確かに研一へ届いている。

「諦めなければ、いつか勝機が見えると思います」

それは明日香が自分自身にも言ったようなものだった。突き進んできた人殺しの道が、徐々にぶれ始めていた。

「……ありがとう」

ほっとした笑顔を見せる研一に明日香は無言で行ってしまふ。

「あ、帰り道気をつけて！」

彼女は何も応えなかった。

「諦めなければいつか勝機が見える、か」

復唱して忘れまいと脳内に刻み込む。

研一が短く嘆息を漏らすと携帯電話が震えた。

「もしもし……あ、二宮さん。え、また新しい情報？　じゃあ明日

この前の喫茶店で、はい」

よし、と彼は小さく意気込んだ。

「臓器売買、ですか」

「はい」

以前と同じクラシックの流れた喫茶店。

研一はブレンドコーヒー、二宮慎吾はアメリカンコーヒーをそれぞれ頼み会話が始まる。

重苦しい内容が嫌でも予想されて、研一の表情はいつにも増して暗かった。

「クレセントで臓器って一体……」

「死にたがる人間はその後の処理をクレセントに任せることがあるそうです」

調べてきた情報を惜しげもなく話す二宮慎吾。聞き入っている研一を見て更に続けた。

「それに、火葬すれば残るのは骨だけ。内蔵なんかは持っていてもそう簡単にばれたりしません」

「でもそんな情報どうやって？」

「企業秘密にしておいてください」

ふっと強気に笑う姿に研一は妙な安心感を覚えた。目の前にいる相手は国にすら勝とうとしているかもしれないと。

「凄いシステムですよ」

「え？」

「クレセントに必要な臓器を用意してもらう代わりに火葬の手配を病院で行う」

それぞれ処理の余るところを見事にカバーしている。循環の流れは完璧だ。

「病院がどこかは……」

「まだ調査中です」

「そうですか」

注文したコーヒーが来て、話は一時中断した。カップに口を付けると傷の痛みに顔を歪める。

「何か揉めましたか？」

唐突な質問にきょとんと見つめ返す研一。

その様子を見て笑った二宮慎吾は自らの口許をとんとんと指で叩く。

「顔の痣です」

「ああ……ちよっと色々あって」

殴られたとは流石に言えなかった。

情報をもらう仲間でも、相手は記者なのだから警察内部の揉め事を知られるわけにはいかない。

記事にされて被害が及ぶのは研一だけではないのだから。

「血気盛んで良いですねえ」

「からかわないでください」

日常会話もほどほどに出来るほど和やかな空気になった。それを断ち切ったのは一本の電話。

「すみません。出ても良いですか？」

「勿論です。どうぞ？」

研一宛てのそれは長々と着信音が流れている。二宮慎吾は大きく頷いた。

「もしもし、お前まだ昼間……え？」

怒っていたはずの顔が一気に青色に変わる。

「何でそんなこと知ってるんだ」

咎めるような研一の口調に両目を瞑っていた二宮慎吾が片方の瞼を開けた。

聞き耳を立てていたらしい。

「クレセントには絶対関わるな。良いな？」

「……好奇心旺盛なお知り合いがいらっしゃるんですね」

明らかに強引な電話の切り方に記者が興味深げな表情をする。

研一は正直に戸惑いの入り交じった愚痴を口にした。

「どっから仕入れたのかクレセントについてあちこちで嗅ぎ回ってるようで……」

「賢明な判断でしたよ。伊沢颯のようになる人間は少ない方がいい」

「わかってます。やっぱり俺は、非クレセント派ですから」

そう答えた研一に、二宮慎吾は満足げに笑った。

Chapter..12

「珍しい光景ですね」

クレセントの事務所に入って早々に、明日香は呟いた。

目の前ではシワだらけのワイシャツを着た葵がぱたぱたとはたきで埃を落としている。滑稽そのものだ。

「見てる暇があるなら手伝えよ」

「何で今大掃除なんです？」

年越し前と言えばそうだが、去年も一昨年もそんな行事をここで見たことがない。

「明日はクライアントが来る日だからな」

「吉沢佐和子は葵さんと面識なんかありませんよね」

すでに書類の中身を頭に叩き込んでいる明日香は言った。

自嘲気味に葵が笑う。

「やっぱお年寄りは大事にした方が良いだろ？」

「……意外な台詞ですね」

「失礼だろお前」

悪態をつきながらも彼は手を止めなかった。

「確かにこんな埃っぽい部屋は不健康でしょうね」

「うるせえ」

さっさと手伝えと葵に命令されて明日香も作業に加わる。

「あれぐらいなんだよ」

黙々とやっていた掃除の手を止めて話し出した上司を見た。

陰りのある物憂げな表情に明日香は言葉を詰まらせた。

「俺の母親の年齢。本物はもういねえけどな、やっぱかぶるだろ面影みたいなのが」

「……私は小さいときに両親とも亡くしてますから、よくわからないです」

それは触れてはいけないところだったらしい。葵ははっとした後、話を変えた。

「そういえば吉沢佐和子は軽い認知症らしい。たまに独身の若い自分になって過去のことを急に話し出すそうだ」

「ご家族はそれを知ってるんですか？」

「ああ。吉沢佐和子自身もはっきり自覚がある」

ため込んでいたインスタントの空き容器を乱雑にゴミ袋に入れていく。

掃除機がここにいることをこのときばかりは疎ましく思う明日香だった。

「お前が話すのは数十分だし問題はないだろうがな」

葵は埃に塗れた雑巾を親指と人差し指で嫌そうにつまむ。

古くなったタオルを使ったのか、黒ずんだ記事にどこかの会社名が印字されていた。それは洗われずにゴミ袋の中へ。

「もし突然暴れたりしたら？」

「俺呼べ。押さえ込むくらい出来る」

先程の敬老とは違う乱暴な考えに明日香が僅かに顔を曇らせた。

「そんな顔すんなよ、好きでやるんじゃないから。……おとなしくしててくれるとありがたいな」

呟く彼は、酷く無機質な表情を浮かべていた。

「あら、香ばしい匂い」

くんくんと鼻を鳴らして白髪の老婆は目尻を下げる。

吉沢佐和子は老人ホームの所長と共にクレセントを訪れていた。

「玄米茶です」

老若男女、様々相手にお茶を淹れてきた明日香。三年で培った技

術は本物だ。鮮やかな黄緑色のそれはふわりと湯気を漂わせていた。吉沢佐和子が口を含む。

「美味しい……。淹れるの上手ね」

「ありがとうございます」

「それでは、私はこれで失礼します」

神経質そうに眼鏡を人差し指で押し上げた所長は手荷物を抱えて立ち上がる。

スーツで固めた姿は老人ホームに携わる仕事をしているようには見えなかった。

「ご苦労様でした」

「いえ。宜しく願います」

葵が軽く言葉をかけると彼は恭しく一礼した。吉沢佐和子の肩に手を乗せて、耳元で囁く。

「元気でね、佐和子さん」

「はい、ありがとうございます」

座ったまま彼女は所長に深々と頭を下げる。どこかぼんやりしたその表情からは真意が読み取れそうもなかった。

「桐原」

「わかってます」

明日香も重い腰を上げた。反動で黒髪がさらりと揺れる。

「行きましようか」

「ええ」

杖が必要な吉沢佐和子に注意しながら事務所からブラックルームへ移動する。

「昼間なのに薄暗い部屋ねえ。壁も床も真っ黒だわ」

物珍しさにきよろきよろと顔を動かす度、彼女のラベンダー色のロングスカートが波打った。

「電気、点けますか？」

「あら必要ないわよ。もうすぐ死ぬんだから」

当人にとっては何気ない言葉に、明日香の心臓が跳ね上がった。

「貴方、何か迷ってる？」

くりくりとした吉沢佐和子の真ん丸の目が形容しがたい表情を浮かべる明日香を映した。

「目を見るとね、色々わかるの。この人は今怒ってるなあとか、悲しんでるなあとか」

「迷ってなんかいませんよ。私が進む道はもう一本しか残ってないですから」

曖昧な微笑みをしていた老婆はしゅんと肩を落とした。

「それは悲しいわね……」

明日香はその憐れむ視線をつっぱねるように乱暴に机にあったファイルをつかむ。

同情をされたくないのだろう。

「始めます。よろしいですか」

「勿論よ」

「吉沢佐和子さん。貴方は何故死にたいんですか」

いつものようにファイルを片手に一通り形式をこなす。

家族の欄を見て明日香は言葉を付け足した。

「お孫さん、いるようですけど」

「いてもねえ……病氣なんだよ」

老婆は諦めたような力ない表情をしていた。明日香が椅子に座らせた彼女の肩は妙に下がって見えた。

「簡単には治らないと言われたらしくてね。娘がたまに持ってきてくれる写真を見るとどんどん痩せて弱ってるんだ」

ブラウスの胸ポケットに入っていた写真の束を一枚一枚めくっていく。

「それでも孫は諦めてない。目に輝きが残ってる」

胸元にそれを押し付けて感慨深くため息を吐き出した。

「依頼人が死んで家族がそれに気付けば国から口止め料が入るんだろう？」

明日香も先日知ったばかりの情報を知っている老婆は国からの見

舞い金を、孫の手術費用にあてようと考えているのだ。

「惚け始めた婆さんより、未来のある孫に長く生きてほしいじゃないか」

少し悩んだ素振りを見せてから、明日香は内線の電話に手を伸ばす。

「どうしたんだい？」

「口止め料目当てだと、私には色々判断しかねます」

金目当ての自殺は初めてのことだった。ただ単にはっきり言われるのが初めてなのかもしれない。

その場合は依頼を中止するケースがあると葵に言われたことがあったのだ。

「それなら、今私が話したことは貴方の胸にしまっておいてくれな
いかしら」

「私に黙認しろと？」

「貴方が良ければ」

「それは」

明日香は言い淀む。交渉を持ち掛けられることのない彼女は明らかに困惑していた。

「狡いわね、私。こんな言い方したら貴方に黙認を強要するようなもののに」

吉沢佐和子は表情を堅くしてなおも続ける。

「でも決断は早い方が良いわ。いつ惚けて暴れ始めるか自分でもわからないんだもの」

「お孫さんにとって、それは幸せなことなんですか」

しばしの沈黙の後、ようやく明日香が絞り出した声は、いつになく弱々しかった。

「貴方が犠牲になって助かることを本人が喜ぶとは思えません」
むしろ悲しむはずだと告げる。

ふっと力を抜いた老婆は自嘲的に顔を崩した。

「確かに、自己満足の話だわ」

「それなら」

「でも私には名誉ある死だから」

もうすでに決めたことだとはっきり言っているようだった。

恐らくする気はなかった説得など、始めから無意味。

「決意があるのなら、こちらにサインをお願いします」

それは黙認することを表していた。少しばかり目を丸くした老婆はやや申し訳なさそうにペンを取る。

「辛い思いさせてごめんなさいね」

書きながら吉沢佐和子が呟く。明日香はただ黙っていた。

「あちらの部屋で担当者が待機しています」

「ありがとうございます」

「どうか来世もお幸せに」

「貴方も、ね」

杖を頼りに真直ぐ死への扉へ向かう老婆。

扉が閉ざされたのを見届けてから、ファイルを壁に投げ付けて明日香はクレセントを飛び出した。

事務所でその物音を聞いた葵が明日香とぶつかる。

「桐原！」

しかし彼の制止を聞くことなく、彼女は階段を駆け降りていった。

外は小雨が降っていた。鈍色の空がより一層重苦しく感じる明日香は傘を差さずにただひたすら歩く。

まばらに歩く人々は、ずぶ濡れの明日香を一度見てすぐに目をそらす。

異質な明日香は道の隅に寄ってしゃがみ込んだ。

「桐原……さん？」

黒い傘を差したスーツの男が、ぎょっとした顔で明日香を見つめている。

それは海野研一だった。

「ちよっ、待って!」

逃げ出そうとする明日香よりも先に腕をつかむ研一。

行き交う人は何事かと視線を送るが、痴話喧嘩と処理されてまた視界から消えていく。

「離してください」

「どうしたの、泣きそうな顔して」

「何でもあります」

うつむいて髪が顔を覆う。心配そうな研一に明日香は冷たく言い放った。

その間にも彼の手から抜けようとじたばた抵抗する明日香だが相手は男であり一応警察官、無駄に終わる。

「これ以上構わないで」

「何があったか知らないけど、風邪ひくよ」

ハンカチで濡れた頭を拭かれる。その優しさに我慢していたが涙腺が緩んだ。明日香の視界がじわりとぼやける。

「悩み聞くくらいは出来るから、ね?」

「どうして」

「ん?」

研一は最後まで明日香の言葉が聞き取れずに小首を傾げる。

「どうして、人は他人の命を奪うくせに誰かのために死ねるの」
雨が強くなった。

Chapter..13

「静谷君のお陰でかなり懐が潤ってるわ」

「そうですか」

砂糖を山盛り五杯入れたダージリンの紅茶を喉に流し込む十夜は、目の前で止まることのない賞賛を喋り続ける新井鈴香に適当な相槌を打っていた。

「老体の適合者もあったし、今回は本当に助かったのよ？ 手術も無事に成功してね」

「本題に入りませんか」

飽きてしまったのか彼は話に歯止めをかける。

「あら、気短なのかしら。可愛い」

お気に入りの十夜と二人で過ごすことが彼女にはかなり特別なことらしい。彼の行動すべてが新井鈴香の心をくすぐっていた。

「単刀直入に言うけど、クレセントを辞めてうちに来ない？」

予想はしていたのか、十夜は無言で口にティーカップを運んだ。夕暮れの光が差し込むそこには、彼ら二人しかない。

「無免許は勿論違法行為だから、出来れば影武者としてお願いしたいんだけど」

他の医者には名前だけ借りて、執刀するのは十夜に一任するつもりだ。

それほどまでに、新井鈴香は自己流な彼の技術に惚れ込んでいる。「すみません。折角ですが辞退します」

やんわりした十夜の断り。聞いた彼女の眉がすぐに八の字になった。

「影武者だから？」

「理由は二つあります」

十夜の白く細長い指が二本立った。

「まず第一に、死体を飾れないからです。遺体に化粧や刺青を施すのは、今の僕には趣味そのものなので」

にっこりと十夜は人の良い笑みを浮かべる。その姿は人殺しとは無縁な学生に見えた。

新井鈴香は十夜の微笑に頬を赤く染める。

「そしてもう一つですが、人を生かすための術を僕は何一つ知りません。出来るのは切るだけです」

聞き入る新井鈴香に彼は続ける。

「そんな人間を病院に置くのはどうかと思いますよ」

「問題ないわ。医者は切るのが仕事みたいなものだから」

両手をテーブルに置いて彼女はずいっと十夜に顔を近付ける。欲しいのだ、彼の技術も彼自身も。

本人は新井鈴香から目をそらさない。

「お金だって希望額を出しても」

「ごめんなさい。仕事が残ってますから今日はこれで」

強引な終わらせ方。平然と言う彼のカップにはもう何も入っていなかった。

「そう、ね……」

タイミングと押しをくじかれた彼女はふらふらと会計をして店から出ていった。

残された十夜は長いため息を吐き出す。

「ゆりかごをヘッドハンティングの場所に使わないでほしいんだけどなあ」

店の奥から現われた七緒。腕を組み納得していない顔で十夜に告げる。

気を使って席を外していたのだろう。

「相手が客だし、十夜君だから仕方なく許可してるのよ？」

「すみません。七緒さんにはいつも感謝してます」

彼は頭を下げた。髪が重力に従って落ちる。

「感謝はありがたいけど……別の形で示してちょうだい」

「何です？」

「あまり二人をいじめないでやって」

明日香と葵のことだ。憂いを含んだ瞳が十夜に刺さる。

「いじめる？」

「無意識ならなおさら面倒ねえ」

「……クレセントは良い踏み台になりますよ」

七緒が一筋縄ではいかないと判断したのだろうか。十夜は髪をかき上げて吹っ切れたように言う。

声は低く冷たい。

「貴方、一体何がしたいの？」

数多くの相手と情報を得るために関わってきた七緒でさえ、彼の異様な姿に生唾を飲み込んだ。

葵の言葉が反芻されてくる。十夜はずっと先を見据えているのだ。「それは見ててください。僕はクレセントの人間に危害を加えるつもりはありませんから」

彼はゲームを楽しむ顔をしていた。

帰るため、扉に触れようとしたところで思い直したように十夜は七緒に身体を戻す。

「桐原に伝えてください。仕事はクライアントが来るまで休んで構わないって葵さんからの伝言です」

「……必ず伝えるわ。ありがとう」

七緒はもう笑ってはいなかった。

「明日香」

控え目なノック。その部屋から返事はない。感情を抑えた七緒の声は、どこか一本調子だった。

「またご飯食べなかったの？」

足元にある冷えた料理は手付かずで、七緒が置いたそのままになっている。

この状態がすでに二日経過していた。

「ねえ、いい加減開けて。身体壊しちゃうわよ」

一人ため息を吐く七緒。親心に近いそれは明日香を思うものだった。

七緒は十夜から頼まれた言伝を話す。

「静谷君がさっき伝言残していったわ。クライアントが来るまで仕事は休んでいいって」

「本当？」

二人の間を隔てていた扉が開く。

控え目に顔を出した明日香は、病的な青白い顔をしていた。眠っていないのか、目の下には薄くクマが出来ている。

「行かなくて嬉しいの？」

「……わからない」

素直な感想を述べる彼女に今日何度目かのため息。

「アタシもわからないわ。明日香が一体どうしたいのか」
愚痴ではない。七緒の本心だった。

それを聞いた明日香は逡巡していたが、意を決して重い口を開く。
「クレセントを、潰したい」

言った瞬間明日香の左頬に衝撃が走った。七緒が明日香に手を上げたのだ。

「二度とそんなこと言わないで」

両肩をつかみ、ぐっと力を入れる。女顔と言っても性別は男、じわりとくる痛みに明日香が眉をしかめる。

七緒は口早に続けた。

「仮にもアタシ達はそこで働いてるのよ？」

「そうだね」

徐々に赤みが差す頬を気遣うことなく問い質す七緒に背中を向け

て窓に近寄る。

小さな背は大きな何かを背負っているように映った。

「……明日香？」

「何で、関わっちゃったんだろ」

酷く腹立たしいような声で、泣き出しそうになるのを堪えた顔で明日香は言う。

「死にたい人の背中ずっと押してきた。何人も何十人も」

呟くような小声が静寂に波紋を作る。

「たまにね、ありがとうって言われるの。あいつの部屋に入る前にクライアントが」

レースのカーテンに爪をたてれば穴が広がった。明日香の中の闇が大きくなるように。

「もっと違う形で聞きたいし、言ってほしいと思うのは、私のわがままなのかな」

「……ご飯、温め直すから、ちゃんと食べなさい」

七緒にはそれしか言うことが出来なかった。

一階に降りてクローズの札をオープンに変えて中に入ろうとする
と、見知った人がこちらに来る。

「こんにちは。やってますか」

それは風来坊のような常連客だった。足しげく通う時期もあれば、月に一回ということもあった。

「あ、はい。どうぞ」

「先程までクローズだったので、何かあったのかと思いました」

カウンターに座り男は言う。ベージュのコートは隣の椅子に折り
畳んで置いていた。

「すみません、ご心配おかけしました」

「お疲れのようですね」

「いえ、ちょっと……姪の体調が悪くて」

他人に明日香を紹介するとき、七緒はいつも姪だと言う。ちなみに明日香の場合は下宿先の大家となる。

気配りの出来るその客は触れる話題でないことを自然と察した。

「今度元気なときにお会いしたいですね」

「ありがとうございます」

七緒はカップを客の前に置いた。ゆりかご特製のブレンドコーヒー。常連客はいつもそれを頼むのだ。

初めて店に訪れたときから、ずっと変わることなくブレンドコーヒーを頼んでいる。

「そういえば久し振りですね。前に来られたのは……一ヶ月前でしたか？」

「ええ。少し仕事が忙しくて」

「仕事？」

「営業のようなものです」

客は疲れの混じった笑顔を浮かべる。

それから数十分、二人はぽつぽつこぼれる他愛のない世間話で過ごした。

「ここは落ち着きますねえ、時間が経つのを忘れてしまう」

「ありがとうございます」

帰り支度を整える男に七緒は満面の笑みで礼を述べる。

「名残惜しいですがまた来ますよ」

「はい。ぜひ」

扉についたベルがからんと涼しげな音色をたてた。

「また来ます……か。次は容疑者として取材させていただきたいものです。片瀬七緒さん」

渋い色のマフラーを口まで持ち上げて、常連客は先程とはまったく違う不敵な笑みを作っていた。

「普通の常連だったら良かったのに……」

残った空のカップを流し台の中心に持っていき上から手を話す。重力に従い落ちたそれは控え目に悲鳴をあげて粉々に割れた。

「二宮慎吾、リスト入り決定だわ」

七緒は冷めきった瞳で使えなくなったカップの破片を握り締める。

「仲間がいるかどうか、一応調べてもらわなきゃね……」
呟きは誰にも聞かれることなく消えていった。

Chapter..14

「冬休みもファミレスで過ごすってあたしら相当悲しいよねえ」

広いテーブルに覆いかぶさる美穂。その姿を眺めながら明日香はストローで烏龍茶を飲む。

そんな彼女が数日引きこもっていたとは知らず美穂は明日香を呼び出していた。

「明日香の予定は？」

「バイトと、課題くらい」

断ることなくやってきた明日香は、クレセントから離れて気が紛れると思ったのだ。

少し考えた後にぽつりと呟く。

「それってほぼ無いようなもんじゃん！」

テーブルを叩くと飲み物の水面が波打った。

「明日香は彼氏作らないの？」

「今は、いらなかな」

控え目な答えに美穂は不満だと言うように唇を尖らせる。

ちなみに美穂本人にも甘いひとときを過ごせる相手はいない。

「じゃあクリスマスもバイト？」

「そうかもね」

「暗い……暗いよ明日香！」

明日香にとって、クリスマスも誕生日もさして重要だと思わなかった。そのためどんな行事があっても毎回仕事優先なのだ。

一般的な女子高生とやや価値観の違う明日香は不思議そうに形の良い眉をひそめた。

「遊ぼうクリスマス」

「え？」

真剣なまなざしを受ける明日香はきよんとする。

「バイトの合間でも良いからうちに来てよ、鍋パーティーするから！」

「……時間があれば」

「うん。来て来て！」

屈託のない笑顔に若干押されつつ、明日香はまたストローを加えた。

久々に戻ったブラックルームに、明日香は何とも形容しがたい安心感を覚えた。

改めて自分の居場所はここだと嫌でも実感させられて、下唇を噛む。

「仕事ならまだないよ」

その様子を見ていた十夜は軽い調子で明日香に声を掛けた。

「いたの」

「冬休み始まってからずっと泊まってる」

すでに三日ここにしていることになる。

「何か飲む？」

彼専用の部屋を覗けば、インスタントのコーヒーやココアのビンが机に並んでいた。コンビニで買っただろう惣菜パンやスナック菓子も一緒だ。

窓枠には湯気のため十夜のカップが置いてあった。

「自宅と職場一緒にする気？」

「桐原と違って僕には帰ったって迎えてくれる人いないからね」
皮肉めいた台詞に返す言葉が浮かばない明日香は、話題を変えることにした。

とは言っても明日香も話したがるタイプではないので当たり障り

のないものが出て来る。

「クリスマスもここで過ごすの？」

「ああ、予定無いね。デートでもする？」

含み笑いを浮かべる十夜に明日香は冷めた顔を見せる。

「パス。他の人誘って」

「冷たいなあ……」

いつもの掛け合い。

引きこもって考え込んだものの、答えがわからなかった明日香はクレセントに戻り、向き合う決意を再度固めていた。

「お、サボりやめたのか？」

タイミングよく葵がやってきた。おどけたような声の問いにぐさま深く頭を下げる。

「勝手なことして、すみませんでした」

仕事に耐え切れず逃げ出してしまった彼女の罪を葵は咎めなかった。

「堅苦しい挨拶はなしだ。どっちにしてもお前らはしばらくここに来なくていい」

「どういことですか」

「そのままだよ。年末だから休業」

クレセントで三年働いて初めての長期休みに明日香は納得を示さない。

そんな姿がわかったのか、葵がぼさぼさの頭を掻いた。

「ゴミ増えたから、掃除するんだよ」

リストの人間を減らすということだ。婉曲な表現だが、明日香も十夜も瞬時に理解する。

「僕は参加出来ないんですか？」

「未成年者には今回遠慮してもらう」

その答えに残念そうなため息を漏らした十夜だが、早々とあきらめて自室に入ってしまった。

残された二人。暗い顔をした明日香の背中を葵が軽く叩いた。

「国が決めたことだ」

「……わかってます」

機械的な声の明日香は、ショックを隠し切れていなかった。

家路につく途中、携帯電話が震えた。画面に表示される、蓮見美穂の文字に通話ボタンを押す。

「もしもし？」

「あ、明日香？ 繋がって良かった。急なんだけどこの前言ってた鍋パーティーしない？ って言っても三人だけでなんだけど」

「え……、今から？」

「うん」

あまり気乗りしないのか、口をつぐんで傷付けない断りを考えるため思い巡らせる。

「私美穂の家知らないし」

「明日香」

ずいぶん近い距離で聞こえた。電話越しではなく直に、だ。

声のした方向を見ると飛び込んでくる勢いで走る美穂がいた。

「ここら辺にいたら会える気がしたんだ！ あたしの勘って凄くない？」

会ってしまったえば話は早い。

明日香は断るために話す時間を与えられず、美穂の手によってほぼ一方的に進む道を決められていた。

「ちょっと早くなっちゃってごめんねー。お兄ちゃんが特売で良いお肉買ったって連絡してきてさ」

十階建てのマンションの四階に住む美穂は明日香をリビングに通すと冷蔵庫から烏龍茶を取り出した。

ナチュラルな色合いで統一された家具や絨毯は一緒に暮らしている父親の趣味だ。もしも美穂に任せたら様々な色で溢れ返るはずだ。

「お兄さん、いたの？」

「うん。言ってなかったっけ？」

初耳だったらしい。小さく頷く明日香。

「ちっちゃい頃に親が離婚したから今もずっと別々に暮らしてるんだけど、たまに遊びにきてくれるんだよね」

四角いテーブルに烏龍茶を置くと明日香から小さな礼が返ってきた。

「頼らないけど普通の兄貴だから明日香も馴染めると思うよ」

「うん」

「もう少ししたら来ると言うから準備しとうか」

カセットコンロをテーブルの中央にセットし、野菜や肉を袋やパックから取り出す。

手伝いを申し出た明日香を客だからと断り、包丁で次々切っている。慣れているのか手際が良い。

「ねえ美穂」

「ん？」

「お兄さんって何してる人？」

明日香としてはただの世間話だった。次の言葉を聞くまでは。

「警察官になって二年目」

小心者のお兄ちゃんが警官なんてあたし的には有り得ないんだけど、と小さく笑いながら美穂は付け足す。

ふとした予感と、ある人物の顔が明日香の脳裏をかすめる。

「……お兄さんの名前は？」

「研一だよ。海野研一」

呼び鈴が鳴った。

Chapter..15

「あ、来たかな」

再び鳴る呼び鈴に美穂は手を洗ってからドアに向かった。残された肉は切られたまま、まな板に寝転がっている。

「はいはい。今開けるから待ってよー」

「いつ来てもこの階段きついな」

息を切らす研一は暑そうにばたばたと手で自らを扇いだ。

「エレベーターで来ればっていつも言ってるじゃん」

「体力作りだからいいんだよ」

彼の言葉は明らかに矛盾している。美穂は呆れ顔だ。

「あっそ。ねえ野菜切るの手伝ってくれない？」

「お前なあ。人が必死でここまで来たってのに……」

明日香と研一の視線が交ざる。先にそらしたのは明日香だった。

「前に何回か話してたでしょ？ あたしの友達」

固まる研一に説明する美穂。ああ、と曖昧に返事をする彼には戸惑いの表情が浮かんでいた。

研一が再度口を開く前に明日香は立ち上がり作った仮面で微笑む。
「初めまして、桐原明日香です。美穂にはいつもお世話になってます」

「……海野研一です。ご丁寧にどうも」

互いに頭を下げる二人。未だに状況を理解していない研一は眉をひそめたり、首を傾げたりしていた。

明日香は変わらず笑顔のままだ。

「疲れてるんなら明日香の話し相手しててよ。でもあたしのことであんまり変な話したら駄目だからね！」

「馬鹿、包丁持って言うなよ！」

「はいはい」

親しげな掛け合いの後、美穂は台所へ消えていった。残された二人。研一は明日香を盗み見てすぐ床に視線を戻す。

「初めまして、ってことにしておいてもらえませんか」

そこまで深い知り合いではないんですけど、と付け足して明日香は言う。

胸のつかえが取れた研一はほっとしたのも束の間、疑問をぶつけた。

「何で？」

「酷い接し方してた相手が友達のお兄さんだったらイメージ悪いじゃないですか、私」

実際の理由は違う。

しかしそんなもんなあと間延びした声で研一が言う。彼は明日香を信じた。

「俺は桐原さんが良い人だと思ったんだけど」

「私が？」

「この前、顔に痣作って愚痴ってた俺に色々言ってくれたときは素直に嬉しかったから」

幸せそうに微笑む研一。明日香は戸惑いながら横目で彼を見つめていた。

血の繋がりがああるせいか似ている。美穂と研一の笑う顔を重ね合わせた明日香が小さく笑った。

「俺、変なこと言ってる？」

笑われたと思った研一は顔をしかめ、不機嫌そうに言う。

「違うんです。馬鹿にしているとかじゃなくて、やっぱり美穂に似てると思って」

「そう？」

「あれ、盛り上がってる。何の話？」

「警察官の仕事大変そうですねって話してたの」

鍋を持って現われた美穂に、すかさず明日香が嘘を吐いた。その滑らかな口振りに内心研一は舌を巻く。

「大変ねえ。その割りにはよく飲み会して酔っ払ってるよね？」

「先輩に誘われるから、仕方なくだよ」

矛先が自身に向いて研一が居心地悪そうに座り直した。

信用していない目を美穂は向けるが、埒があかないと思い直したのか軽く手を叩く。

「さて、鍋やろっか。今日は自信作だよ」

蓋を開けると牛肉や青野菜がぐつぐつと煮えていた。すき焼に研一は喉を鳴らす。

「ビールある？」

「警察官が未成年者の前で堂々と飲酒する気？」

「……お茶で良いや」

妹に負ける兄。

程よく煮えた鍋を三人で囲み、箸をつついていく。

「あ、そうそう。お兄ちゃん何であの電話怒ってたわけ？」

「電話あ？」

牛肉をくわえた状態で尋ねられた研一はそのまま聞き返す。

「もう、クレセントの電話だよ！」

美穂が大きな声を出す。その瞬間明日香と研一の顔が固まった。

「ば、馬鹿！ 桐原さんの前で何言ってるんだよ！」

「は？ 明日香は知ってるよ、クレセントのこと」

目を見開く研一に明日香は少しだけと言いながら控え目に頷く。

恐れていたことに唇を噛む。

「深入りするなよ二人とも」

声のトーンを落とし彼は言った。

「明日香もそれ言ってた。でも人は犠牲を払っても知りたいことがあるの」

「おい美穂……」

「誰が何て言おうと、あたしは諦めないからね」

嫌な沈黙が続く中、ただ一人食欲旺盛だった美穂が鍋を空にした。片付けも一通り終わった頃合を見計らって明日香は立ち上がる。

制服のプリーツを少し整えてカバンを手を持った。

「ごめん、私そろそろ帰るね」

「じゃあ途中まで送るよ」

「大丈夫です」

「良いから良いから。男は利用出来るときにしとくべきだよ」

ひらひらと手を振り、美穂は二人を送り出した。

暗くなった歩道を並んで歩く。

「強引な妹でごめんね」

「いえ。賑やかで楽しかった」

「それなら良かった」

懐かしむような明日香の微笑みに研一も表情を和らげた。

「いつもの道まで大丈夫？」

「はい」

少し歩いてから、ゆっくりと明日香が口を開いた。

「知ってたんですね、クレセントのこと」

「俺の知り合い……っていうか職場の先輩が、クレセントに潜入したんだ」

クレセント絡みで明日香が知る警察官だった男は伊沢颯しかいない。

そっと目を伏せて彼女は続きを聞こうとする。

「結局その人は帰って来なかった」

研一は足元に転がる石をぼんやり見つめる。

「後で調べたら、その人は話せない身体になってたよ」

それを蹴ると、数回跳ねてどこかに行ってしまった。

「許せないんだ。同じ人間相手の命を奪っても裁かれないクレセントが」

もみ消される事実。存在さえ元からいなしと思わせるほど完璧なそれに、研一は憤りを感じていた。

「……今日は三日月です」

囁くような明日香の声が研一に届く。

曇り空のすき間から薄く月明りが道を照らす。三日月は雲に隠れ、二人の前には現われようとしなない。

「不完全な人間の集まりだから、クレセントという名前になったそうです」

以前葵がそう言っていた。何かが欠けた四人は、今もこうして在り続けている。

「桐原、さん？」

「早く止めないと、美穂は本当に死ぬかもしれません」

さわりと風が二人を包んだ。明日香の黒髪が自身の顔を隠す。

近しい人間に迫る死の香りに研一はぐっと背筋を伸ばした。

「貴方も、危険ですよ」

恐怖を感じた様子を見た明日香はふっと表情を和らげる。

「失礼します」

「待って」

首から上だけ振り返った明日香に研一が言う。

「聞いても良い？ 警察嫌いな理由」

「……昔両親を殺されました。犯人は未だ見つからず、時効を迎えるのを待とうとしています」

一旦言葉を切り、彼女は息を吸い込んだ。

「使い物にならない警察が大嫌いです」

それは研一をも拒絶したようだった。

Chapter..16

研一は警察署署内にある資料室にいた。

「桐原、桐原……」

真剣な彼に周囲の人間は近寄ろうとはしなかった。二人を除いては。

「今度は何やってんだお前」

「またクレセント関係か？」

いつものように現われた田口と内山。段ボールに囲まれ、当然のように床に座る研一を不思議そうな目で見ている。

「いえ、今回は妹の友達について」

「妹の友達？」

「彼女か」

「違いますよ！……ご両親の事件が解決されずに捜査打ち切られたみたいで」

警察官になる前とはいえ、自分でも力になれるのではないか、研一はそう考えたのだ。

話を聞いた田口達は段ボール箱を覗く。

「それで過去の事件を洗ってるわけか」

内山が書類をつかんで適当にページをめくる。

「いつの事件なんだ？ 殺害方法は？」

「さあ……昔としか」

もごもごと曖昧な研一。それでもページをめくる手は止めなかった。

「お前まさか知らずに調べてるのか？」

「はい」

「馬鹿だ」

「ああ、馬鹿だな」

「何なんですか二人して!」

大きな声に一瞬周囲の視線が集中してまた散った。内山と田口の馬鹿発言に彼は目を細める。

「未解決の事件なんて腐るほどあるっての」

「田口の言う通りだ。両親殺された子供だって少なくはない」

「そう、なんですか?」

深く頷く二人の姿に研一はため息を吐いた。丸くなった格好を尻目に内山が続ける。

「第一お前の調べ方は古典的すぎる。こういうのは機械に頼った方が効率的だ」

研一に立つよう促して、内山は資料室内の奥にあるパソコンが設置されたデスクに座る。長い足を組み、肘をつきながら慣れた様子でキーボードを叩く。

田口も興味を示して画面を上から覗き込んだ。

「彼女の名字は?」

「桐原です。植物の桐に原っぱ」

「昔……、三年前から五年間で下ってみるか。両親殺害の未解決事件」

一人呟きながら次々に入力されていく検索条件。小気味よくキーボードが鳴った。

内山はくると首を動かして研一を見やる。

「他にキーワードは?」

聞かれた本人は少し遅れて首を横に振った。

「了解。地域は県内に絞って、検索」

砂時計が数秒出て画面が切り替わる。選出された事件の文字に研一は瞬きせずそれを見つめた。

「早い……」

「だから言っただろう? 効率的に機械を頼れって」

「八件か」

田口がぼつりと言った。内山は長く息を漏らす。

「充分だな。後は娘がいたかどうかを重点的に見ながら調べればいい。無ければ条件をずらせ」

「あ、ありがとうございます」

後で何か奢れよ等と言いつつ、二人の男は去っていった。研一は大きく深呼吸してからパソコンに向き合う。

「これじゃない、か。残り三件」

一握りの事件数とはいえ、最初から最後まで目を通している研一は疲れから目頭に手を当てていた。

残りのうちになればまた明日調べようと諦めの色を濃くしていたが、次の瞬間目の色が変わった。

「朝、隣人が桐原家の一人娘が血塗れで外に倒れているのを見つけて事件発生に気付く……唯一すべてを知るはずの当時六歳の少女は何もわからないとしか答えなかった。桐原家は引越してきたばかりで恨まれるようなこともない」

小さな文字をゆっくり読み上げる。内容すべてを頭に入れるためだった。

「死因は刺殺による失血、凶器や容疑者が見つからず参考人もなし、強盗の要素も見られず……。お手上げだったわけか」

研一はくたびれた椅子の背もたれに思い切り寄り掛かった。

「何してるの」

自分より幾分か広い背中に向かって明日香は尋ねた。
くるりと顔を向けて十夜は答える。

「部屋の整理。年越し前にやっておこうかと思ってね」

「そう」

「そこにある段ボール取ってくれる?」

足元の箱を無言で持ち上げ、十夜の後ろに置く。

「ありがとう」

箱の中には数冊の本が入っていた。何気なく明日香がそれを開くと鮮やかな色彩が広がる。

「死体の写真」

「ああ……壁にも限度があるから、古いものはアルバムに入れてるんだ」

剥された写真部分の壁は入った当初のままだった。無造作に重ねられた整理前の写真を眺めて呟く。

「あんたは人殺しをしたくてクレセントに入ったの？」

「急な質問だね」

言葉とは裏腹に、彼は平然としていた。

「僕が初めて殺したのは生まれたばかりの猫だったかな。野良猫が生んだ子猫を見つけて、近くに流れてた川に流したんだ」

写真を吟味しながら仕分けしていく。彼なりのこだわりがあるのだ。華奢な指がせわしなく動く。

「親は近くにはいなくて、瀕死状態だったのを今も覚えてる」

音が発することを拒むかのような静寂だった。外も中も、何も聞こえない。

「静かに迎える死が、僕をここまで成長させてくれたんだろうね」
彼は穏やかに笑う。明日香は何も言わなかった。

「あ、今頃一斉駆除の最中かな」

「……そういう言い方やめれば」

「性格丸くなった？」

「あんたは何でいつも他人の神経逆撫でして」
文句を言おうとする明日香の前に十夜は二本指を立てる。

「そんな桐原に二つ、予言するよ。まず一つ目はこの場所は近々なくなるよ」

話す余地を与えられない明日香は折れて一本だけ立った指を睨んだ。

「そしてもう一つは、君の大事な知り合いが危ないということ」

「……美穂のこと話したの？」

十夜の胸ぐらをつかみ床に押し付ける。声には恐怖と不安が入り交じっている。つかむ手も微かに震えていた。

「気にしてる暇があったら探した方が良いよ。もう政府は動き始めてる」

やや強引に明日香の手を押し退ける。

目を彷徨わせ、彼女はばたばたと部屋から出て行った。

「僕の手の内から逃げるなんて、誰も出来やしないんだから」
遠いどこかを見る彼の手はただ空をつかんだ。

Chapter..17

「もしもし、美穂？」

「うん。明日香から電話なんて珍しいね、どうかした？」

喜びを含んだ美穂の声だが、それに構っている余裕が明日香にはなかった。足早に歩く先は美穂の自宅。

「今どこにいるの？」

「どうしたの、恐い声」

「いいから答えて」

いつもと違う明日香に戸惑いつつ答える。

「家だよ、自分の家」

「誰か一緒にいる？」

「お兄ちゃんがもうすぐご飯食べに来るけど……今は一人」

「私が行くまで誰も家に上げないで」

「ねえ明日香。本当にどうしたの？」

母親が諭すような声。明日香は心の中で舌打ちした。

「説明は会ってから。出掛ける準備、一応しておいて」

電話は切れた。こちらに来ると言う明日香の緊迫した様子に一抹の不安を覚えながらも、美穂は言われた通り外出の支度を始めた。

人目につかないよう細心の注意を払い、マンションの階段を駆け上がると聞き慣れた声が入った。

「おい美穂、何なんだよ一体。早くドア開けろって、寒いだろ」

「明日香との約束なんだってば！　ちょっとくらい我慢して！」

ドア越しの兄妹喧嘩。美穂は明日香の言葉を忠実に守っていたが、いくらか気が立っているようだ。

「ちよっとって……もう五分は待ってるぞ」

「男ならがたがた言わない！」

あんぐりと口を開ける研一の脇をすり抜けて明日香は扉に手を添える。

「美穂」

「明日香？」

鍵が開いた音と同時にドアも開き、美穂は明日香に食ってかかる。「早く説明してよ！　いきなり居場所聞いて家にお兄ちゃんでも入れるなって言うし、ご飯食べるのに出掛ける支度しろって！」

明日香の赤いマフラーを弱々しく握る。

「意味わかんないよ、明日香の馬鹿……」

「ごめん」

混乱を招いたことを素直に謝罪し、美穂の頭を撫でた。短時間の展開にまったくついていけなかった研一はただ尋ねる。

「何、どういうこと？」

「失礼」

彼の疑問が解決するのは少し先延ばしになる。

研一の背後に男が立っていた。ひよろ長い研一より頭一つ上の高身長に筋肉質の身体が真っ黒なスーツで隠れる。男は三人を見下ろしていた。

「海野研一さんですね。ちよっと話を伺いたいんですが」

低姿勢を繕う男に研一と美穂は騙されかけたが明日香は違う。

研一を引っ張って後ろに下げる。背を屈めて相手の中に入り込み、素早く回り込んでスタンガンを当てた。びくりと痙攣した男は地面に倒れる。

啞然とする兄妹に明日香が冷めた表情で振り向く。

「ついて来て」

店のドアについたベルが渴いた音をたてた。顔を上げた七緒は明日香の姿を確認すると微笑む。

「おかえり。早かった、の……ね」

途中で言葉がちぎれたのは、明日香の後ろにいた二人を見たからだった。

一人は青ざめ、もう一人は戸惑いながらも店の内装を見回している。

「明日香、そちらは？」

「クラスの友達とそのお兄さん」

「初めまして、蓮見美穂といいます。こっちは兄の研一です」
明日香の紹介にすぐ頭を下げる美穂と研一。

「あ……初めまして。明日香がいつもお世話になってます」

「何飲む？」

「じゃあ、コーヒーを。美穂は？」

「ココア」

兄の後ろに隠れて、警戒気味的美穂だが欲しいものははっきりと言った。

「コーヒーを一つとココアを二つ」

「わかった。作って持ってくる」

三人は店の中でも奥の席に向かった。今日も客はいない。

明日香はいつもの指定席に、美穂達はその向かい側に腰を下ろす。

「外は危険だからしばらくここで生活した方が良いと思うの」

「待って」

美穂がテーブルに肘をつけて止めに入った。

「もっとちゃんと説明してよ。このままじゃ全然納得出来ない」

「クレセントに関わったせいで二人は政府に追われてる」

「もしかしてさっきの男が政府関係者？」

明日香は小さく頷いた。倒れた男をそのままにして逃げたが、自

分の存在がばれてしまうことに気付いていた。

それでも、口封じに殺すような真似は明日香には出来なかった。

「じゃあ……あたし達殺されるってこと？」

ぐらりと瞳が揺らいた。美穂の顔からどんだん血の気が引いていく。好奇心で自らが進んだ道の間違いにようやく気付いたのだ。

「そこまではされない。でも話せなくなった人間がいるのを俺は知ってる」

彼の脳裏には伊沢の変わり果てた姿が映っていた。

「ただ聞きたいのは君がどうしてこの事実を知ってるかだ。俺達を助けるために美穂に電話したんだろう？」

すべてを告げれば、楽になる。そんな悪魔の囁きを聞いた明日香は口を開きかけたが邪魔が入った。

「明日香、ちょっと良い？」

七緒に手招きされてカウンターの隅に移動する。踵を返し、明日香に向き直る彼は険しい顔をしている。

「どういうつもりなの」

「何が？」

明日香はわざと素知らぬ振りをする。

しかし相手は付き合いの長い同居人、気付かれないわけがない。

「はぐらかさないで。友達はともかく、お兄さんの彼はリストに載ってる人間よ。知ってて連れてきたんでしょ？」

盗撮写真つきのリストを見せられた明日香は海野研一の文字を見て下唇を噛んだ。

キッと睨むように七緒を見上げる。

「あの二人は傷付けたくない。だから私が匿う」

何か言おうとする七緒にかぶせて彼女は話し続ける。

「勿論罰は受けるわ。七緒さんは私に脅されて仕方なく協力したと言っても言えば良い」

「馬鹿言わないで。匿うなんて簡単なことじゃないの」

明日香の両肩をつかむ手に自然と力がこもる。

「いずれ知られる。その後は二人をどうするわけ？」

「それを今から考えるの」

「……情に流されて、自分の命落とすつもり？」

珍しく無鉄砲な明日香を七緒が冷静に諭す。

「なるべく人を嫌いになって生きてきた。全部拒絶してここまできたの」

友人と呼べる人間を彼女は持ったことがなかった。必要がない、そう思っていた。

「でも二人だけは、どうしても嫌いになれない。だから見捨てることも出来なかった」

強い目線にあきらめたようにふっとため息を吐く七緒。

冷たかった瞳は柔らかかなものに変わっていた。

「……似てるものね、絵理子さんに」

「そんなことないと思うけど」

「雰囲気かしら。どこをって聞かれると悩んじゃうけど、近しいものがある気がする」

ふわりと七緒の手のひらが明日香の頭を撫でた。

「それに貴方が自分の意見を通すなんて珍しいしね。アタシも協力するわ」

「……ありがと」

蚊よりも小さな声で明日香は照れくさそうに言った。

Chapter..18

鬼ごっこ時間約二日。短いゲームの終了を知らせたのは明日香達のリーダーだった。

「そう、わかったわ。わざわざ連絡くれてありがとう」

「葵さんから？」

七緒は頷いて受話器を戻した。アンティーク調の電話がリンと音をたてて静かになる。

「リストの内で見つかったのはほんの一握りらしいわ。とりあえずまた次回に持ち越してことで上ともまとまったって」

「じゃあ二人はもう大丈夫なの？」

明日香の問いに七緒は眉間にシワを寄せて肩をすくめた。

「でも期間がどれくらいかはわからない。一ヵ月か一年後か……決
定権は政府にあるから」

「それまでに片付ければいいだけでしょ」

「ずいぶん軽く言えるわねえ」

「口先くらいは言わせてよ」

自嘲めいた彼女の笑みに疲れが見えた。独り言のように小さく呟く。

「この前あいつが言ってた。クレセントはもうなくなるって」

明日香があいつ呼ばわりする人間は十夜以外いないことを七緒は知っている。

「ねえ、七緒さん。大丈夫だよね」

「当たり前でしょ」

歯を見せて七緒は笑った。

「二人に伝えてきたら？ アタシは葵ちゃんのところに行ってくる

から、留守番お願い」

「わかった」

ようやく明日香の表情がいつものものに戻る。それに満足し、クリーム色のマフラーをゆったりと巻いて彼は店を出ていった。

「葵ちゃん、アタシ」

「入れよ」

クレセントの事務所には、ドアに背を向けて窓の外を見上げる葵がいた。

近くまで来て七緒はマフラーを外しながら話し出す。

「電話で言ってたわよね？ 明日香の匿った人間は無事だったか、って」

振り向かず葵は答えない。

「何の根拠もなく発言するような人じゃないのはアタシがよくわかってる。いつから気付いてたの？」

「リストの人間は二人の少女といたが、その内の一人にスタンガンで気絶させられた。政府からの連絡だ」

人差し指と中指で報告書をはさみ、七緒に見せつける。

それを奪うように取り上げて食い入るように紙を読み始めた。

「少女とスタンガンでピンと来たよ。でも桐原が情けをかける相手がいることの方が考えられなかった」

「明日香のこと、上には」

報告書から顔を上げて葵の背中を見つめる。

「何も知らないで押し通した」

「ありがとう。……絵理子さんにね、少し似てたの。匿った兄妹は、明日香にとっては大切な存在らしいわ」

憂いを帯びた瞳はただ汚れで黒ずんだ床を眺めていた。

「見逃すのは今回だけだ。桐原にも言っておけよ」

「ねえ、明日香をクレセントから切り離してあげられないかしら」
「正気か？」

今日、初めて葵が七緒を見た瞬間だった。
驚きとはまったく別の、呆れて突っ撥ねるような強い口調に七緒はぐっと押し黙る。

「辞めた後の人間を何人見てきたんだ」
クレセントでは古株になる二人。葵の言い方で逃げ出した仲間がいることを物語っている。

「わかってる。わかってるけど……やるせないわ」
絞り出すような七緒の声に葵は一瞬渋い顔をした。

「あの子にはまだ未来があるのよ」

「それをいばらの道にしたのは桐原自身だろ」

「でもそれは……！」

「どんな理由であれ、クレセントから抜け出すことは出来ない」
言い返そうとする七緒を圧倒するほど、彼の瞳は冷めきっていた。
重みのある言葉に七緒がうなだれる。

「ごめんなさい、どうかしてた」

くしゃりと前髪をかき上げた。

「葵ちゃんだったものね。明日香のクレセント入りを最後まで反対したのは」

「昔のことだろ」

「そうね……。さっきの件、必ず明日香に伝えるわ」

「七緒」

帰ろうとする後ろ姿に葵は呼び止めた。振り向いた七緒に視線をずらして一言告げる。

「すまない」

「やあねえ、どうしたのよ急に。変な葵ちゃん」

しおらしい葵を不思議に思いながらくすくすと笑った。

「じゃあまた来るわね」

ウインクしながら手を振り事務所のドアを閉める。

ため込んでいた息をゆっくり吐き出してノブから手を離れた。

「七緒さん？」

「十夜君」

冬にも関わらず白いワイシャツにジーンズの薄着で彼は立っていた。

両手で紙袋を抱えて七緒と距離を縮めていく。

「珍しいですね。七緒さんがこっちに来るなんて」

「ちょっと葵ちゃんと話したかったの。でも明日香に留守番任せてあるから早く帰らなきゃ」

人の良い笑みを浮かべる七緒。

「でもその前に一つだけ、良いかしら？」

「何でしょう」

「クレセントはなくならないわ。貴方が考えるほど甘くはないのよ」
七緒なりの宣戦布告に十夜は口許をゆるめた。

「……肝に銘じておきます」

Chapter..19

「そうか、終わったのか……」

眠り込む美穂の横でうたた寝していた研一を控え目に揺らして起こす。

まだ夢見心地な研一だが、明日香の知らせにほっとした表情を見せた。

「ひとまずは元の生活に戻っていたいただいて結構です。美穂にもそう伝えてください。私は店番があるので下にいます」

研一は店に戻ろうとする明日香の手をつかむ。ぴくりと身体が跳ねて、二人の視線ががち合う。

彼は力を緩めず真直ぐ彼女を見つめたまま、こう尋ねた。

「君はクレセントの一人なの？」

単刀直入。明日香の脳裏にそれが浮かぶくらいあっさりと研一は切り出した。

「……どうしてそう思うんですか」

「冷静になればなんとなくわかるよ。それにそう考えたら俺達を助けられたことも説明がつく」

ぎゅっと握力が強くなった。

「でも君の口から聞きたい。桐原さんの言葉でちゃんと」

「人殺しには、触らない方が良いんじゃないですか」

研一を強引に振り払い明日香は顔を背けて言った。それは自らがクレセントであることを肯定したも同然。

「帰るなら裏口から出てください」

すらりと部屋から出ていく明日香。

尋ねた研一も、事実を把握しきれずただ呆然としていた。

「……お兄ちゃん」

「お前起きてたのか？」

か細い声に横を見ると眠っていたはずの美穂の瞼が開いていた。研一の袖をつかみ不安げな目を向ける。

「明日香が、クレセントの一人ってことなの？」

「その仮説が一番成立つんだ」

下唇を噛み、悔しそうに答える研一の肩をつかんで美穂は吠えた。

「じゃあ何であたし達を助けたのよ！ クレセントは人殺しの集団なんでしょ？ 明日香はそんなじゃない」

「本人も、認めてただろ」

「あたし聞ってくる。きちんと話聞けばお兄ちゃんが間違ってるってわかるもん」

「やめろ」

耳をつんざくような銃声と、何かが割れる音。自然と兄妹の言い争いも止まった。

何事もなかったかのように静寂が続く。

「何、今の音……」

「行こう」

弾かれたように二人は部屋を飛び出した。

「……酷い客ね」

腕をつたってぽたりと血が床に水溜まりを作る。

左肩を押さえる明日香は正面にいる男をただ見つめていた。

「それはこっちの台詞だ。昨日は手痛い痺れだった」

薄く笑うその男は、明日香がスタンガンで気絶させた政府関係者だった。

黒い鉄の塊は明日香を捕らえて離さない。

「今日はその仕返し？」

「まさか。政府は進路を変えるのさ」

意味がわからず彼女はただ眉間にシワを寄せる。

そんな様子をせせら笑うと男は高らかに続けた。

「人殺しの集団クレセントを潰しにかかることを明日の夜、大臣が発表する。君を逮捕したことも話せば信憑性は増して国民も政府を認めるはずだ」

「……国は裏切るわけね。汚い部分を全部押し付けて、貴方達は信頼を勝ち得る」

不利な状況の中、明日香は毅然と言い放った。

「そんなまがい物の信頼で国は変わらないわよ」

「知った口を。お前に何がわかるっていうんだ」

核心めいたものを突かれて動揺した彼は非難を浴びせる。

微かににじむ汗をうっとうしく思いつつ明日香は血の付着した手で黒髪を後ろへ払った。

「別に何も。第一わかりたくもないし」

「何……？」

高飛車な態度をとる明日香に男は唸るような声を出した。

「芝居なら勝手にやればいい。でも、私はその劇に入る気はないわ」

「撃たれた割に良く回る口だ」

銃の引き金に男の骨張った指が触れた。

「明日香こっち！」

美穂の大声と銃声はほぼ同時だった。美穂は明日香を引っ張り、研一は叫びながら銃を持つ男に突進した。

戸惑う明日香の手を無理矢理引いて喫茶店ゆりかごから飛び出す。

「血が……、早く手当てしないと」

人気のない路地裏まで走ってすぐに美穂が明日香の傷を見た。

鮮血は止まることを知らず地面に落ちていく。

「止血出来るから平気」

七緒からそこそ教わっていた応急処置を自らに施す明日香だが一本しか使えない腕や初心者な美穂だけでは上手くいかなかった。

「お兄さんは大丈夫なの？」

美穂は強く頷く。

「無事に逃げたみたい。でも別行動は危険だからどっかで落ち合おうって」

「……もう二人を巻き込むわけにはいかない」

思い詰めた表情の明日香の背を叩く。

「今更じゃん、そんなの。あたしは、あたしを助けてくれた明日香を助けるの。プライゼロでしょ」

「美穂……」

「あ、お兄ちゃんから電話きた。ちょっと待ってて」

少し離れる美穂。その間に明日香も七緒へ連絡をとったが相手は出ずにコール音だけが続く。

「繋がらない……どうして」

「ただいま入ったニュースをお伝えします。都内の新井病院が臓器売買をしていることがわかり、警察が家宅搜索に乗り出しました」
電気屋に並んだ商品のテレビ画面が一斉にニュースを読み上げた。
真横にいた明日香は病院の名前にびくりと反応して携帯電話を落とした。

「新井病院ってうちに近いよ、あそこそんな危ないことしてたんだ」
それを拾い上げて他人事のように呟く。受け取る明日香の手はわずかに震えていた。

「クレセントの、客なの」

「え？」

「死ぬ前に希望した人の臓器を提供して、新井先生はそれを買った」

上手く成立っていた関係。それを崩した組織に明日香は気付いていた。

「国が認めてたはずなのに……！」

「とりあえず手当てしよ、ね？」

裏切りに自分の太股を激しく殴打した。

珍しく気性の荒い明日香を気遣いながら、人目を避けて兄と約束した場所に向かう。

「美穂、桐原さん」

すでに到着していた研一は二人に駆け寄った。

「俺も美穂の家も駄目だ、見張られて中に入れない」

「じゃあ明日香の怪我どうするの、ずっと抑えてるのに血が止まらないんだよ！」

ヒステリック気味に美穂が涙声を上げた。

黙ったままの明日香は顔色がどんどん青白くなっていく。

「わかったから落ち着け」

「このままじゃ明日香が」

「わかってる。……一か八かだ、行こう」

Chapter..20

アパートの二階、偶然にも非番だった彼の存在を研一は忘れてはいなかった。

「それでうちに来たわけか」

「お願いします、助けてください」

研一は田口に頭を下げた。下げられた当人はくしゃりと自らの髪をかく。

有りのまますべてを話す研一に明日香は複雑そうな顔をしたが口を挟もうとはしなかった。

「さっきニュース見た。あの病院、クレセントと関わってるんだってな」

後ろにあるリビングを指差して彼は言う。

タンクトップにジャージ姿の田口はポケットに手を入れたまま再び話し出す。

「警察はきつとクレセント逮捕に駆り出されるぞ。それくらいお前にもわかるだろ」

弱った獲物を狩る絶好のチャンスだと、彼は遠回しに告げていた。「わかってます。でも彼女は俺達の恩人なんです。お願いします」

研一が頭を下げて、美穂もすぐそれに倣った。明日香はただ荒く呼吸をする。

その様子を田口は見つめてため息を吐いた。

「止めるよ、頭下げられんのは慣れてねえんだ。誰か来る前に早く上げ」

「田口さ……」

「勘違いするなよ。逮捕前に死なれてもうちの面目丸潰れだからな」

「ありがとうございます」

兄妹は顔を見合わせてまた頭を下げた。

「桐原さん」

田口が用意した来客用の布団に座る明日香の肩が跳ねる。振り返れば申し訳なさそうな顔で研一が立っていた。

「驚かせてごめん。夕飯出来たから呼びに来ただけ」

台所からは美穂と田口の騒がしい声が聞こえてきた。

それに苦笑しつつ、研一は明日香の答えを待つ。

「お腹減ってないから結構です」

「そう」

研一がドア付近で腰を下ろす。胡座をかいて長く息を吐き出した。

「一つ聞いて良い？」

「何ですか」

「どうしてクレセントに入ったの」

パツと明日香が研一を見る。彼は真直ぐ明日香を見つめていた。

「……始めは、自棄になってたんです」

そう切り出した明日香はうつむいて布団の端を握った。

「家族を殺されて何故か自分だけ生き残って。犯人を恨めば少しはマシでしょうが私には記憶がない」

研一の頭に調書で読んだ事件の概要が浮かんだ。

「生きる意味がないから、死ぬことも考えました。でも出来なかった」

そつと触れた左手首に幾筋も刻まれた傷が一瞬露になり、研一は何かを堪えてぐっと押し黙った。

「そのとき、人の死を扱う政府組織の存在を知ったんです」

「それが、クレセント」

初めて間に入った彼の問いに明日香は頷いた。

「母の知り合いが七緒さん、昼間いた喫茶店の人でクレセントのメンバーだったんです。何度も無理を言って、入れてもらいました」
懐かしむような笑顔から一転して、影の落ちた表情になる。

「屋上から落ちようとする人の背中を押してきた。それでも必死にしがみつこうとしていた手を足で踏みにじった」

生きたいと思い直した人間も殺した経験のある明日香は自らの身体を抱いて呻くように言った。

「君は直接手を下したわけじゃないんだろ？」

「それでも、私が殺したようなものです」

否定する言葉を研一は言わなかった。それが明日香のためにならないとわかったからだ。

「浅はかだと、愚かだと後悔しても、抜け出したら殺されるかもしれない。だから逃げもせず生きてきました」

「ごめん」

苦々しげに吐露する明日香に研一は手を差し延べた。

「……もういいから。考えよう、これからのこと」

そろりと手を伸ばしかけた明日香を止めたのは、携帯電話の着信音だった。

液晶画面に浮かび上がる片瀬七緒の文字にためらうことなく明日香は通話ボタンを押した。

「もしもし」

「ワンコールで出るなんて流石七緒さんの携帯電話」

予想とはまったく違う人物の声に反応が遅れた。

「何で、あんたが出るの」

「そんなの簡単さ。一緒にいるからだよ」

十夜は気分良さに明日香へ返答する。電話越しにスプレーと金属がぶつかる音が聞こえて、彼女の焦りを高ぶらせる。

「……七緒さんに替わって」

「残念だけど今話せないんだ。きっとこれから、ね」
思わせぶりな言い方に彼女は息を飲み込んだ。

「もし気になるなら、事務所においで」

そこで電話は切れた。再度かけ直しても、電源を切られたらしく連絡がつかない。

「桐原さん？」

「私ちょっと思ってきます」

「行くってどこに」

彼の身体が明日香の行く手を阻んだ。

「単独行動なんて危険すぎる」

「……ごめんなさい」

隠し持っていたスタンガンを研一の首に押し当てる。

「本当に、これ以上関わらせるわけにはいかないから」

倒れた研一を布団に寝かせ、明日香はマフラーを巻いた。

最近よく走るな、と霞みがかった頭で明日香は思った。

「葵さん、桐原です」

全力で事務所までの階段を駆け上がり、息を整えることも忘れてドアを乱暴に叩いた。

しかし返事はない。

「葵さん？」

ドアノブを回すと簡単に開く。

深呼吸をした後、明日香は中に飛び込んだ。

「……っ」

ソファに転がる葵のシャツは、彼の血で深紅に染まっていた。

身体に突き立てられたナイフは鈍色に光り、ソファ周りには同じような血の色をした造花の薔薇が飾られている。

驚きのあまり悲鳴を上げることも出来ず、明日香はよろよろと葵に近寄った。見開かれた目を閉じてやり、彼女は立ち上がって事務所を出る。

「ずいぶん早かったね。走ったの？」

すぐに十夜の声がした。警戒心むき出しで明日香は彼を睨み付ける。

相変わらず、十夜は曖昧な笑みを浮かべていた。

「でもちょうどよかった、僕の最新作が出来上がったんだ」

ブラックルームへ歩き始める十夜。充分距離をあけてついていく明日香に彼はほくそ笑んだ。

彼専用の部屋に通されると、暗闇の中で一点光る場所があった。

「綺麗だろ、咎色の天使とでも名付けようかな」

電球の真下にある椅子に座らされた見覚えのある人間。純白のドレスに乱雑に描かれた黒と赤のスプレーアートに明日香は目眩を覚えた。

いつも結ってあった自慢の金髪は、下ろして本人の顔を覆っていた。

「七緒さん……」

「折角作ったけど後で二つとも処分するよ。メインの材料は今届いたから、腕鳴らしにはなった」

施錠された音が妙に大きく響いた。明日香とドアの間に、十夜が立っている。

「まあ届いたってよりは自分から現われたって方が正しいかな」

どこか愉快そうな彼の口調に彼女はかたかたと震え出す。

「桐原」

びくりと身体が跳ねる。青白い顔をする明日香に、十夜は言い放った。

「僕が飾ってあげる」

Chapter..21

十夜が明日香へ連絡する三時間ほど前のことだった。

「……肝に銘じておきます」

そう言った十夜が七緒の胸にナイフを突き立てた。短く悲鳴を上げて崩れる。

「七緒！」

物音を聞いてドアを開けた葵は血相を変えて彼を抱えた。床にたたたる血は湖のように広がっていく。

「あ、おいちゃ……」

とぎれとぎれに七緒は葵を呼んだ。

「アタシ、死ぬのね。不思議……恐くない」

咳き込んだ後、喉が苦しげに鳴いた。

葵は七緒の身体を支える手に力を込める。

「俺がお前をクレセントに巻き込んだこと、今更後悔してる」

「ホント、今更だわ」

死ぬ間際なのに、と力なく笑う姿につられて葵も唇を歪めた。

「でも楽し、かつ……」

「七緒？」

閉じられた瞼が開くことはなかった。声を押し殺して七緒の手に顔を埋める葵の後ろで嘆息の音が聞こえる。

「驚きましたね、深く刺したつもりでしたがずいぶん饒舌で」

十夜は抜いたナイフをくるくる回して手持ちぶさを解消していた。

「……俺も殺すのか？」

「すみません。必要不可欠なことですから」

死人に慣れているのか、彼はいつものように微笑んでいた。

そんな十夜を見て葵は座り込み壁に背を預ける。ぼさぼさの髪が壁で潰れた。

「俺がここに入ったのは、親友に騙されたからだ」

唐突に始まった昔話に、十夜はおとなしく耳を傾ける。

「楽に高い給料がもらえる仕事がある、そう言われて入ったのがクレセントだった。親友は俺を身代わりにして逃げ出した。結局殺されたがな」

それが葵にとって初めて国からの裁きを見た瞬間だった。選ばれ残された彼は時を経てクレセントの長を勤めているのだ。

「最初から気付くべきだったんだ。こいつがずっと止めてたってのに」

静かに拳を握り締めた。

「もう少し、マシな生き方したかったな」

「そうですか」

感情の欠片も感じられない十夜の相槌が気に入らないのか、不満げに彼を見上げた。

「お前今何考えてる？」

「特に何も」

吸って良いか断ってから葵は煙草に火をつけた。吐き出した白い息は空高く舞い上がっていく。

「七緒を殺して俺もってことは、桐原もやるのか？」

「どうでしょうね。今は政府に追い回されてるでしょうから、夜にでも呼びますよ。お二人を作品にしますから」

「男前にしろよ」

それは死を認めた発言だった。

「努力します」

皮肉めいた葵に十夜はにっこりと笑って返す。

「……俺は桐原に何も話さなかった」

「安心してください。今日すべて話すつもりです」

「変わらなかったな、お前は」

しみじみと懐かしむように葵が呟いた。遠い目の先に、十夜の姿はない。

「クレセントに入ったときと何も変わらない。あの頃のままだ」

「変わる気がなければこのままにいるのは当然でしょう」

「ここをどうする気だ？」

「こんな殺人組織に未練がありますか」

十夜からの質問に葵が嘲笑う。

「そんなもん、とうに捨てたよ」

「貴方は頭の良い人だ。勘も鋭くて、僕の中じゃ要注意人物の先陣を切ってたんだけど」

血が付着したナイフを布で押さえ、丁寧に拭う。

「無欲であきらめの早いところはあまり好きになれなかった」

「……俺は女にしか興味がねえよ」

「そうですか。残念です」

吸いかけの煙草が地面に落ちた。

「お兄ちゃん！」

「海野、しっかりしろ！」

騒がしい声に研一は瞼を上げた。

真顔で見下ろす美穂と田口にゆっくり身体を起こす。

「二人とも……何で」

「何でじゃないよ、なかなか戻って来ないと思ったら倒れてるんだもん！」

意識をはっきりさせた研一は田口の腕をつかむ。

「桐原さんは」

「逃げられた。まったく、まだ本調子じゃないってのに」

「クレセントの仲間から呼ばれてました。脅されて、行かなきゃって……」

目を彷徨わせ、頭を抱える研一の携帯電話がフローリングの床で震えていた。

誰からの着信か見ることなく彼は通話ボタンを押した。

「二宮です。ニュース見ましたか？ クレセントが大々的に取り上げられてるんです」

「そうみたいです」

明日香ではなかったことに肩を落とす。

「海野さん。政府の手先が来ませんでしたか？」

「……来ました」

「やはりそうでしたか。ご無事でなにより」

「すみません、これから急ぎの用事があるんで失礼します」
構う暇はないと言いたげに研一は話をさえぎった。

「ああ、時間を取らせて申し訳ない。ではこれだけ伝えておきます」

二宮は一層声のトーンを抑えて言った。

「クレセントのアジト、つかみましたよ」

「本当ですか？」

急に研一の態度が変わり美穂や田口も聞き耳を立てようと身体を伸ばす。

「ええ、今からちょっと見に行こうかと思ひまして。海野さんも一緒にどうかと思ったんですが、先約があるならいずれまた」

「どこにあるんですか、クレセントは」

「気になるんですね。どうでしょう、ワタシと物々交換しませんか？」

「そんなこと言ってる場合じゃないですよ！」

あくまでも自分のペースを貫く二宮に研一の苛立ちは一瞬に募る。

「それは貴方の問題でしょう？ 急ぐのなら早く話してください、ワタシでも満足出来るクレセントの情報」

研一が見なくてもわかるくらい、二宮は嫌味っぽく笑っていた。

Chapter..22

目を覚ましたとき、明日香の周り以外は暗かった。寝かされた彼女は天井のライトに手術室を思い浮かべる。

そうして気付く。ここが彼の部屋であることを。

「気分はどう？」

「……最悪」

死体の座る椅子に腰掛けて十夜は問い掛けた。それを一瞥して明日香は短く返す。

「そう。インターネットで買った薬だからかな」

「それ以前の問題よ」

動かそうにも首から上しか言うことをきかない状況に彼女は危機感を覚える。

「アンタ、何がしたいの。葵さんも七緒さんも殺して私も殺すわけ？」

あれは夢ではなかった。事切れた二人の姿が脳裏をかすめ、明日香は下唇を噛む。

「この前両親に会ってきた」

不意に彼は言う。

「他人のことを僕がとやかく言える立場じゃないけど、あの人達は光の下で生きてるべきじゃなかった」

「親はいないんじゃないの」

「生きてるけど、一緒にはいないね。だいぶ前に縁も切ってる」

「……アンタを生んだ親なのに、ずいぶん冷たい言い方するのね」

「そっちこそ酷いなあ。僕は桐原に感謝されるべき存在だよ」

十夜は形の良い唇で薄く笑った。

「君の両親の敵を討ったのは、僕なんだよ」

「何、言ってるの」

理解が出来ず上手く話せない。

「わからない？」

椅子から立ち上がり、ゆっくりとした動きで明日香の横までくる。

「家族を殺して君一人を生かした犯人は僕を生んだ両親だ」

徐々に目を大きく見開いていく彼女の姿に満足した十夜は話を続けた。

「僕と同じで殺生好きな両親は、動物や虫を殺して欲望を抑えてたんだ。でも我慢出来なくなって十年前初めて人を殺そうと考えた。偶然にも選ばれたのは桐原の家」

耳をふさぎたくなるような話に、手足が動かないせいで瞼を下ろして堪えるしか方法がなかった。

「昔からあった習癖を知ってた両親は子供の僕に言ったんだ。残しておいた、あとはお前がやれ」

いつになく饒舌な十夜は小さく息を吐いた。

「そのときは意味がわからなかったけど、初めて桐原を見て気付いた。君は僕が殺さなきゃいけない」

血で染まったナイフが明日香の真横に突き刺さる。恐らく刺された七緒のものだ。

「でも両親がこれ以上醜い快樂殺人者になるのを見てられないから別の事件を引っ張り出して逮捕してもらった」

警察を騙すのも案外簡単だったよ、そう彼は口にした。

「勿論、桐原の事件を口外しないと両親に約束させてね。知られたら面白くないだろう？」

「……私を殺す理由はわかった。でも七緒さん達の理由にはならない」

平静を装う明日香は十夜を見つめる。

「桐原をメインとするなら今までやってきたのはサブかな。君を殺すために、僕は他の人間で腕を磨いた」

「やり直そうなんて甘い夢を見た私が馬鹿だったのね」

彼の人を殺す理由に自分が関わっていたのだから。

すべてを悟った明日香はどこか穏やかだった。

「自首でもする気だった？」

「一瞬考えた」

「それは蓮見さん達の意見？」

「それもあるけど、これは私の意思」

生き方をやり直すことを彼女は望んでいる。きっと今も、だ。

「桐原、僕と新しい道に進む気はある？」

「……例えば本人が望んだとしても、人が人の命を奪うことはいけない。それが私の結論よ、第一あんたとは徹底的に反りがあわないから悪いけど進むなら一人でお願い」

「残念だな。皆僕から離れていく」

刺さったままのナイフを彼は引き抜いた。

ライトに反射して光るそれに彼女は目を細くした。

「神にでも何か祈る？」

「人を殺めた私達に、神を信じる権利があると思う？」

「そう言うと思ったよ」

いつもと変わらぬ冗談めいた掛け合いを聞いていた人間はもういない。

「そろそろ時間だ」

十夜はナイフを振り上げ、明日香は静かに目を瞑る。

「さよなら、明日香」

Chapter..23

「三日月永眠、か。凄いタイトルですね」

「人目を集めるのにはちょうどいいだろ？」

煙草をくゆらせ、二宮は部下に笑みを見せた。

部下が持っているのは、明日発売される週刊誌だ。表紙にはでかでかとクレセントの文字が書かれている。

「それより頼んでた件、どうだった」

「ああ……正直よくわかりませんでした」

胸ポケットから手帳を取り出した部下は調べた結果を読み上げる。

「静谷十夜の遺体というか、遺骨も見つかってないらしいんです」

「骨も？」

「はい。まあ、あれだけ燃えたから仕方ないかもしれませんが……」

あの日、二宮がクレセントの事務所に向かったときにはすでに火の手が上がり、どうすることも出来なくなっていた。

クレセントのメンバーと思われる男二人は刺殺され、奇抜な服装でごみ捨て場に転がっていた。それを見つけたのは、研一達だったのを二宮は見ている。

「皮肉なもんだな」

「え？」

「桐原明日香はクレセントの記憶を忘れて、静谷十夜は死亡すら確定出来ない」

瀕死の状態で助けられた明日香は警察病院にて保護されており、マスコミも容易に聞き込みが出来ない。

煙とともに吐き出した二宮の台詞に部下は首をひねる。

「そのどこが皮肉なんです？」

「クレセントの半数は確実に死んでないってことだよ」

「はあ……」

「永眠っていうより仮眠かもしれないな」

誰にも聞こえないほど小さな声で呟く。

「二宮さん何か言いました？」

「いや、別に」

「それにしてもお手柄ですよ。クレセントの一人が昔の一家殺害事件の被害者だなんて」

興奮気味に部下は言った。ペンで記事を叩き鼻息も荒い。

「どこのメディアでも扱ってない情報です」

「そりゃあ努力と取引の賜物だ。お前も良いネタ探せよ」

大きな返事をして部下は二宮から離れていった。

「せいぜい世間を騒がしてほしいもんだ」

煙草を灰皿に潰して空を仰ぐ。真っ青なそれは、確かに彼の瞳に映っている。

「なあ、誰かさんよ……」

その呟きはやはり誰の耳にも届いていなかった。

「ごめん、起こした？」

「……大丈夫」

昼寝から目を覚ました明日香は瞼をこする。その姿に研一は微笑んだ。

入院している彼女は以前より少し痩せた。記憶を失い、あまり食事を摂らずこんこんと眠る日が続いている。

「ねえ海野さん」

「ん？」

「何か忘れてる気がするの。大切っていうか、そういう何かを」

自分でも上手く言えず、もごもごと濁す。

研一は一瞬驚いた顔をするがすぐに戻した。

「全然思い出せなくて、わからないの」

「さっき、美穂が見舞いに來たんだ。寝てるならまた今度來るって」

「そう……、次は起こしてね」

「わかった。花飾るから水入れてくる」

くしゃりと明日香の頭を撫でて研一は出ていった。

「行ってらっしゃい」

左袖をまくり、腕に残る赤い蝶の刺青を見つめる。自分で入れようと思っていなかったはずのそれは、色鮮やかだった。

「何か、忘れてる」

そう口に出した瞬間、どこからかバイブの音が鳴った。

辺りを見回すと警察から返された明日香の携帯電話が震えている。

データはすべて警察が消したため、番号が記載されても誰かわからないが、画面は非通知となっていた。

「もしもし」

「久しぶり」

「……どなたですか？」

「蝶はカゴに閉じ込められちゃったか」

残念だなど電話の相手は呟く。

「桐原。いずれ自分から出ないとその綺麗な羽根が腐るよ」

「何言ってるの。貴方は誰？」

「三日月が消えたら、次は満月だね」

明日香の質問には答えない。

「今度は満月に会おう」

通話が切れた。たった数分の話でも妙に頭からこびりついて離れない。

花瓶を持って帰ってきた研一は様子が変わった明日香に声をかける。

「どうかした？」

「……何でもない」

「そう？」

不思議に思いながら研一が背を向ける。

明日香は携帯電話を握り締めた。

「満月になれば、きっと会える」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2575g/>

三日月は眠る

2010年10月8日14時48分発行